

悪役にされた俺の末路

盾長

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは『ゆゆゆい』を終わらせないたくないある神様の願いによって悪役にされた一人の少年の物語。少しでも長引かせるため、彼は一人バーテックスに変わって勇者達と対峙する。

目次

一、ファーストコンタクト	1
初陣	4
発令、彩雲作戦！	6
彩雲は輝かず	9
ヴィクトリアス防衛戦	12
楽しい仲間達	15
次の作戦まで	17
101高地は燃える。	20
冬の雄叫び作戦（前半戦）	23
冬の雄叫び作戦（中盤戦）	26
冬の雄叫び作戦（終盤戦）	29
足組みは築かれた	32
多国籍過ぎる初夏の風	35
青嵐作戦―前哨戦―	39
迫真の時間稼ぎ	42
やがて戦いは終盤へ向かう	45
青嵐作戦は次の局面へ	49
風は静かに吹きすさぶ	52
秘匿するは刃を構えた大嵐なり	55
星舟はその勇者を庇うため	58
奮発！ 艦首統括速射砲！	61
日常の中に潜む巨大な影	64
地下深く眠る無数の鋼	67
数多の塊が基地から離れる時	70

勇者空中同盟最初の初陣

72

天鈿女命の特製ドリル

75

孔明がそう囁いているんだもん！

77

奇抜空母、此処に現る！

80

一、フアーストコンタクト

時に神世紀300年5月1日(仮定)ゴールデンウィークの最中、俺と彼女達の出会いは互いに遭遇と言う形で現実の物となった。俺は一種のテレパシーのような物と「自称神様」と名乗る謎男からとある能力を授かった。「全ての兵器を自在に操れる」それが俺の能力だった。

実在する物から架空の物。さらに自分で考え出した物まで。何でも自由自在且つ無制限に扱う事が出来た。俺こと「壇上春男」は筋金入りのミリオタである。これほど個人的に嬉しい能力は他にない。俺は一人この「自称神様」と言う未知なる存在に感謝した。

話を戻そう。俺は西暦時代からやってきたごく普通の高校生だ。この世界に来るまでは本当にごく一般的に過ごしてきたのだが不運にも道端にあったバナナの皮で横転し、その勢いのまま車に轢かれ現在、幽体離脱と言う形でこの世界にやってきている。神様曰く一応俺はまだ死んでいないらしい。

分かり易く言えば生死の境をさまよっているらしい。つまり俺の本体は病院のベットのようだ。

さて、俺の役割について話そう。上述の通り、俺と彼女達のフアーストコンタクトは「遭遇」と言う形で幕を開けた。しかも、最悪なケースで。神様曰く。

「君には『ゆゆゆい』の世界に来てもらった。悪いが君には悪役を演じてもらう。その能力で思う存分暴れまわってくれ。頼む。もう少し彼女達の時間を長引かせてほしい」

との事だった。要は『ゆゆゆい』本編を出来るだけ終わらせないで欲しいとの事。俺が悪役になって新しい敵を作りもう少し彼女達のイチヤイチャライフを覗きたい。それが神様の願いだった。(伝わったかな。

こうして俺は神様の自己中心的な願いによって悪役にされ、俺は

今、戦果真つ只中の最前線に居る。

―遭遇―

俺は今、四方八方、三百六十度何処を見渡しても一面木の幹で埋まった世にも奇妙な世界に居る。俺が立っているのもその木の幹の一つ。デコボコしていてバランスを崩しやすくとても運動やジョギングには適さない地形だ。また、それなりの遮蔽物はなく、不思議な事に昆虫や動物は一切いない。水源もないためサバイバルで生き残るのはまず無理だろう。

遮蔽物がない。これは戦車戦にはあまり適さないステージとなっている。車体を隠す物体がなければただの同然。だから俺はこの時、戦車を選択しなかった。

海軍はそもそも戦場となる海がない。

「風先輩ツ！ あそこに人が居ますツ！」

「本当ねエ……しかも男子じゃない！」

「アンビリーバボー、驚いたわ。まさか私達意外にも人が居るなんて……」

これが俺と彼女達との出会いであった。

―戦闘―

陸の主力である戦車が適さない以上、俺はアニメヤマトに出てくる宇宙戦艦をこの世界に召喚した。召喚陣から現れたのは初期の地球防衛艦隊。あの赤と黄色のカラーリングが特徴的な宇宙戦艦である。葉巻型で艦橋と砲塔がくっついた独特なデザイン。俺はこのデザインを意外にも気に入っている。

所謂、ムラサメ型とかコンゴウ型と呼ばれている物だ。

何故このタイプを選択したか。

答えはいたってシンプル。俺は、彼女ら相手にこの程度で充分であろうと考えたからである。

彼女ら相手に波動砲はいらないであろう。それが俺の答えだった。だが、この選択が致命的なミスとなるのはまた先のお話。

「撃てッ！」

後に樹海と呼ばれる世界に召喚された通称「国連第一艦隊」が15人は居るであろう彼女ら勇者に対し最初の砲火を放った。緑色に輝くレーザー光線は真っ直ぐ勇者達に向かって吸い込まれていく。

初陣

神世紀300年5月1日、宇宙巡洋艦「有明」から放たれた緑色のビーム光線が射線通りに進み命中。二発放たれたうちの二発が肩周りに当たったと……俺は思っていたんだ。酷いよ、全くの初見殺しだ。

「有明」から放たれた光線は当たったと思っただけで弾かれるように四方八方へと細かく散り命中した彼女に何とかすり傷すら負わせていなかったのである。原因は後の研究で驚きの結果を得る事になるがそれはまた先のお話。

俺は、やってはいけない「先制攻撃」を彼女達勇者にしてしまった。彼女らからしてみればそれはもう、俺からの宣戦布告と言っても良い状況である。

「撃ってきたわ!」

「高嶋、怪我はないか!」

「うーん……? 全然平気だよ?」

彼女らに動揺が走り、俺は嫌な汗で一杯になる。俺は直ぐに反転を指示。この砲では勝てないと悟った俺は屈辱的な撤退作戦を敢行した。俺はとつさにその場を去るように走り、二百メートル近くある戦艦や巡洋艦は旋回を始めた。

俺を止めようとする彼女らの声は小さくなっていき、直ぐ後ろでは次々と戦艦らが討ち取られていった。

どんな風に爆沈していったのかは知らない。ただ無人の樹海を後ろも振り向かず走った。味方からすれば敵前逃亡も良いところ。この時、俺は自分自身の事しか考えられなかった。走って走って、とうとう息切れて後ろを振り返った。

そこにはあれだけ居た艦隊がたったの六隻にまで撃ち減らされていた。

「金剛」「鳥海」「初春」「親潮」「朝潮」「メリーランド」。クラスは分

からないがこれがこの戦いで生き残った面子のようだ。

「たったの……これだけ……？」

ただ立ち尽くすしかない。20隻近くいた艦隊が今や僅かに6隻。うち1隻は中破。話が違うじゃあないか。自称神様。

後に「第一次樹海内海戦」と神様によって名づけられる戦いは我が軍の惨敗と言う形で幕を閉じた。

参加艦艇26隻のうち、生きて帰ったのは僅かに6隻であった。

樹海化と呼ばれる現象が現実世界へと覚めつつあるこの境で、俺はあの戦いを振り返り次こそはの決意を固めた。

―戦後―

樹海化と呼ばれる現象が解けた後、俺は飛ばされたのはどうも四国の観音寺市と呼ばれる町に強制転送されたらしい。

自称神様のサポートは手厚かった。

家がない俺はその神様の指示通り、市内にあるホテルにしばらく泊めてもらう事になった。根回しが効いていたのか、俺はフロントに入ると直ぐに部屋へと案内してもらった。

ベットが一つに机と椅子がそれぞれ一つずつ。机にはパソコンが置かれている。窓からは太陽の光が差し込む。

此処が、当面の間、僕が過ごす新しい住まいになった。

ところで、住まいは確保したのだけれど食事は……どうやって確保したら良いんですかね？

発令、彩雲作戦！

結局あの後、自称神様からのメールによって食料は自給自足で補えと言う鬼畜電文が届き、俺は今近くのコンビニにて食料と水の調達に当たっていた。しばらく此処が僕にとつての補給基地として申し分ないほどの活躍を見せてくれるのだろう。

また、此処で浪費される費用は全て自己負担ときたものだ。勇者と言う未知なる敵と戦い、その上で地理上の不利を抱えているのだ。こう言った方面でのサポートも手厚くしてくれなきゃ自称神様のお願いは達成できないであろう。

最も、此処で愚痴ったところで何一つ環境が変化するわけではないのだが。

……後1・600円あるかないか。これが今持てる全財産である。詰みゲーとはまさにこの事。これが尽きた時、俺はそのまま餓死するのだろうか。未来はとても悲観的だ。

丁度その頃、その自称神様から一通のメールが手持ちのスマホに届いた。このスマホの手数料は全て神様が自己負担してくれているらしい。此処だけは太っ腹と認めてあげよう。内容は以下の通りだった。

「発令！・彩雲作戦！・壇上君は直ぐに艦隊を率い樹海化に備えてもらいたい。本作戦の主目的は新兵器回収にある。詳細はおつて報告する」

俺は新兵器と言う言葉に少し戸惑いを覚えるも、樹海化はメールを見た直後にやって来た。全ての物が止まり、何処からか花びらのような物が大量に吹き荒れてきた。なるほど、これが所謂「樹海化」と言う奴か。

スマホを取り出し、俺は戦いに備えた。

先の戦いからまだ数時間と立っていない。

―戦闘―

「発令、彩雲作戦！ 樹海を横切る新兵器を粛々と回収せよ。貴官の武運を祈る」

樹海に入って直ぐ、俺のスマホにはこのようなメールが受信されていた。どうやら、その新兵器はこの世界を突っ切ってやってくるらしい。

本作戦に必要な艦種は「空間母艦」と言われる空母の一種だ。つまり、今回俺に与えられる新兵器はきつと、勇者に対抗出来るほどの力を持つ戦闘機なのだろう。

プロペラかジェットか。それだけで本作戦の難易度は充分に変わってくる。前者なら下手をすると貰える兵器が全て破壊されて作戦失敗。後者なら艦隊が全滅してその戦闘機が降りられなくなり作戦は失敗する。

俺はスマホの画面の操作し、艦隊を簡素ながら緊急編成。もって参加艦艇全艦に出撃を命じた。

数分後、艦隊は背後から突如出現し俺の両脇で陣形を形成し始めた。

参加兵力は極めて大規模である。

先の戦いで苦い経験をした俺は前回の二倍ほどの兵力で挑み、部隊も二つにわけた。一つは真っ向から勇者と対峙する戦闘艦隊。そしてもう一つはその新兵器を回収するためだけに編成された特務機動部隊だ。

戦闘艦隊の旗艦は戦艦「バトル・オブ・ブリテン」。特務機動部隊の旗艦は空間母艦「天城」。有名な空戦と未完成の空母の名を関したそれぞれは部隊は俺の号令とともにそれぞれの作戦地域に向かって発進した。

「諸君らの武運長久を祈る。全艦、戦闘用意ッ！」

それっぽい言葉を決めて、俺の艦隊は今、勇者達の目の前に布陣した。「バトル・オブ・ブリテン」を旗艦にした戦闘艦隊は本艦を含めた戦艦20隻。支援艦は巡洋艦18隻。駆逐艦12隻から成る空前絶後の大艦隊だ。

一方、俺の上空で空中待機している特務機動部隊の編成は空間母艦「天城」を筆頭に6隻。護衛には駆逐艦12隻、巡洋艦3隻。

俺は一番兵力の多い戦闘艦隊を囷とし、新兵器到着までの時間稼ぎに使った。主砲の弾種はビームが通らなかったため、ごく普通の通常弾。

問題はこの程度の装備で、果たしてどの程度時間の稼げるのかと言う事。

同日午後18:25分、戦艦「バトル・オブ・ブリテン」を含む戦闘艦隊は勇者達を射程圏内に捕らえ、火蓋は切って落とされた。

彩雲は輝かず

かくして作戦は始動し、艦隊は時間稼ぎと言う目的を遂行するため実弾を用いた射撃を開始する。事前に、自称神様から樹海に傷をつけると現実世界にも影響を及ぼすと聞く。

そのため、地面には届かぬようあらかじめ全ての弾頭は地面に到達する前に起爆するようにセットされている。主砲から放たれた実弾は全て空中で炸裂しているのだ。

当然、地面に当たらないようにセットされているため地上に居る勇者達には傷一つさえつかない。だが、現実世界に影響が出てしまうのなら仕方があるまい。戦艦に積まれている主砲の大きさは大体30cm以上。もしくは未満。

これらの主砲弾が、はたして地面に弾着した時。どれほどのエネルギーが発生するのかなんて実験でもしなければ到底分かりえない。俺は、現実世界に現れる影響を恐れてわざと主砲の威力を下げたのだ。

「空中で炸裂している……だど？」

「……妙ね」

地上で、10人以上はいるであろう勇者達が空中で炸裂していく主砲弾の花火を注意深く見物していた。上空で炸裂するため、容易に艦隊へ近づけないのであろう。俺にとつては願ってもいないチャンスだった。

これが一秒でも長く続けば実質、無駄に戦艦を失わずに済むし到着するであろう新兵器を無事に回収する事が出来るかも知れない。

虫が良すぎるかも知れないが、俺はこのご都合主義的な展開が今後にも更に続くよう願った。そして、その新兵器を回収するため俺は特務機動艦隊に対し飛行甲板を空けるよう指示を出した。

万が一、勇者らが機動艦隊の輪の中に入ってくるのであれば甲板上に待機している艦上攻撃機「電龍」を発艦させ、これを守らせる任務

に就かせようとしていた。

だが、みた限りでは此処まで勇者はやってこない。

俺は慢心し、甲板上の艦載機を全て艦内に入れて新兵器の到着を待った。

艦隊は以前として主砲を撃ち続け上空に色鮮やかな薄い花火を描き続けていた。

「地上からの迎撃は難しそうね」

「でも見た感じ、下から容易に攻撃が出来そうですね……そこら辺はどうなんでしょうか？」

「下から……そうね。上がダメなら下から攻撃を仕掛けるのもありかも知れないわ」

「なるほど……考えたな銀」

「じゃあアタシ、ちよつと下から攻撃してみます！」

「銀がいくタマも行くぞ」

変化は突然起こった。艦隊にはアラームが鳴り響き、旗艦を含めた全艦が動揺し始めた。空中で描かれる濃厚な防空網はあっさりと無視され、今やがら空きとなっている艦隊下部から勇者達が熾烈な猛攻撃を加えてきたのだ。

勿論、下への攻撃手段を艦隊は有していた。が、下へ爆弾を投下すれば必ず現実世界に影響が出る。

俺は思わず、艦隊下部への攻撃を躊躇してしまった。

勇者の一部が血気盛んに艦隊の下へ潜り込み、人間とは思えないようなジャンプを繰り返して手に持つ双剣のような物を戦艦に突き刺した。

丸みを帯びた盾のような物も変わった軌道で飛行を繰り返し、付近に布陣する戦艦を悉く粉碎していく。

また、遠方より濃厚な弾幕を平気で飛び越えてくる槍のような物や弓矢のような物が最前列に布陣する艦を一瞬でなぎ払った。

この最前列に居る艦の中に旗艦「バトル・オブ・ブリテン」も存在

し、同艦は槍のような物を受けて大破。一時間後に爆沈した。

当然、旗艦の爆沈は俺の下にも届き戦況の変化によく気づいた。

「艦載機を急ぎ発艦させよ……主力艦隊の援護に回るのだ……」

一度収容してしまった艦載機を再び発艦させるのはまさに愚の骨頂とも言えよう。機動部隊各艦は慌しく艦上戦闘機の整備を短時間で済ませ甲板上に並べた。

甲板の点検も同時進行で行い、艦橋付近にある信号機を用いて発艦の合図を出す。

赤から青へと変わった信号機を確認すると、艦上戦闘機「電龍」は一機、また一機と樹海の上空に舞い上がる。

しかし、この作業中。妙な情報が主力艦隊に所属する戦艦「摂津」からもたらされた。聞けば、勇者が一人だけこの混乱の中、姿をくらませたのだと言う。

俺がその奇妙な情報をスマホで確認している中、突如として空母「カレイジャス」が大爆発を起こした。

艦載機が並ぶ甲板が炎に包まれ、カレイジャスは空中に漂う火の玉となった。

「グット……先ずは一隻ね……」

俺の目の前に鞭のような物を持った一人の少女が物音立てず、その場に立って居た。

どうやら俺は絶対絶命のピンチに立たされたようだ。

ヴィクトリアス防衛戦

「……エクスキューズミー。貴方はどなた？」

「……」

どうやら、俺の存在にも気がついてしまったらしい。カレイジャスが燃える中、二人の間に妙な空気が流れている。薄い黄色？ のような変わった服装をしている彼女が狙っているのは間違いなく航空機を離発着させるこの空母郡であろう。

うち一隻はあのうねる鞭のような物で大破。……いや、中破か？ いずれにしても大損害を被った。これは此方に対する先制攻撃としてみて良いのだろうか。発端を開いたのは此方だが機動部隊に傷を与えたのはあの少女だ。

向こうは此方とコンタクトを取ろうとしているようだが、今はそんな余裕がない。残存する5隻をいかに守るかで精一杯だ。

「……艦載機発艦はまだか」

「ワッツ？ 艦載機？」

残存する5隻の飛行甲板には直掩機が並び、その主力は艦上戦闘機「海電」である。高性能な万能機。機動力も高く旋回性能ではどの艦載機よりも郡を抜いている。だが、その分デメリットもある。

海電のデメリットは整備性や信頼性に欠け、特に空中で無茶な飛行を行うと空中分解してしまうと言う致命的な欠点がある。整備製が悪く発艦に時間を要すると言うのも大きなデメリットの一つだ。

海電のモデルは勿論、帝国海軍のゼロ戦。海電発艦まで俺は時間を稼がなければならなかった。

普通なら彼女との会話を試みる物なのだが、此処まで距離が近いとかえって話しづらくなる。だから彼女との戦闘を選んだ。

こっちには一応、先に攻撃されたと言う大義名分がある。

「全艦砲撃開始ッ！ 海電発艦までの時間を稼げ！」
「アンビリーバボー！ いきなり撃ってきたわ!？」

護衛を担当する駆逐艦らが母艦の前に出て驚愕する彼女相手に射撃を開始した。だがこれはまだ警告射撃。空中で炸裂する例の弾を用いてわざと外すように指示した。できれば本格的な戦闘は避けたい。

こんな至近距離じゃあ俺もつい射撃に躊躇してしまう。相手は同じ人間でしかも女子。戸惑うのも無理はないだろう。

前に出すぎている駆逐艦を下がらせ、代わりに装甲のある巡洋艦を前衛に配置した。問題は巡洋艦の装甲で何処まで持つのかだが。

「そう。そっちがその気ならこっちも本気で行かせてもらおうわ！」
「何……突っ込んでくるだと……?」

警告を受ければ普通、一歩ぐらい下がるのかと思っただけだが彼女は下がるどころか一気に距離を積めてきた。俺は彼女が繰り出す鞭の攻撃に辛うじて身を交わす事が出来たがこの先には艦載機を順次発艦させている空中母艦の群れがある。

マズい。非常にマズい。一応、それなりの陣形を整えているとはいえ対人戦闘は全く想定していない。

距離が縮む中、彼女が狙いを定めたのは一番前に布陣している英空母ヴィクトリアスだ。あの鞭を食らったらカレイジャスのような火達磨になってしまう。

「何をしている!? 弾幕が薄いぞ！ 構うなッ！ 当ててるつもりで撃てッ！」

躍起になって声を上げた途端、薄かった弾幕は瞬く間に濃くなった。周囲を囲っている駆逐艦や前衛を務めていた巡洋艦が主砲や対空砲をとにかく無茶苦茶撃った。

当てるつもりで撃っているはずなのだが何故か彼女のほぼ手前で爆発している。そして爆発するたびに何かがチラツと出現している。何だコイツは。

「貫ったッー」

「……ッ!？」

気を取られている間、彼女の鞭はヴィクトリアスを射程内に収めた。もうダメかと思つたその時。彼女に捨て身覚悟で突っ込んだ戦闘機が居た。

いや、もう捨て身。特攻に近い。超至近距離で特攻を仕掛けたのは発艦したての海電そのものだった。

海電の捨て身をもろに受けた彼女は一旦陣形から離れついに艦のレーダー上からロスとした。捕捉できる範囲にはもう居ないらしい。

この戦闘。俺はただ見守る事しか出来なかつたのだが、海電の捨て身攻撃により辛うじて空母ヴィクトリアスの防衛に成功したようだ。

一時的な戦闘が終了した後、機動艦隊の一部を成す駆逐艦からある報告がスマホのチャット欄に「ひら分」で表記された。

「新兵器をレーダーで捕捉しました」

彩雲作戦の醍醐味である新兵器の到着。それは俺の士気を高めるには充分すぎる要素だった。俺は無言でガッツポーズを決めた。

そして、その新兵器は想像を上回る大部隊であった。

だがちよつと待つて欲しい。

新兵器が航空機と言うのは聞いていたのだが……これは何かの冗談なのだろうか。

楽しい仲間達

友軍としてやってきたのは、とても航空機とは言えないような代物ばかりだった。先ず、先頭に行くのはコックピットと胴体がそれぞれ分離してやがる謎めいたドイツの試作偵察機であった。

スマホの Wiki を開きそれらしい航空機を探した結果。こいつは「ブロームウントフォス BV 141」と言う変態偵察機だ。設計者はドイツの技術者「リヒャルト・フォークト氏」俺は今、彼にもう少しまともな形をした航空機はなかったのかと今すぐにも問い詰めてみたい心境だ。

しかも優雅に飛んでいやがる。

後続に続いているのはまた独特な外観を持つ戦闘機「フォッケウルフ トリープフリユーゲル」開発国は勿論、ドイツだ。

名前にあるとおりフォッケウルフ社が設計した垂直離着陸機なのだが V2 ロケットのような胴体を持ち、小さなラムジェットでその飛行を可能としていた。

一応名目上は戦闘機なため対勇者戦に投入する事は出来なくもないが、正直俺は今、コイツらを実戦に出す事にためらいを覚えている。

友軍とは思いたくもない友軍はまだまだ続く。同じくドイツからやってきた「ブローム・ウント・フォス BV P202」もまた神様から授かった頼もしくもない友軍機である。

設計者は勿論、安心、安全、平行運転なりヒャルド・フォークト氏。俺は彼からなんらかの呪いをかけられているのだろうか。それとも好かれているのだろうか。こいつは可変斜翼機と呼ばれている。

名前の通り、翼が斜め上に生えている斬新な変態航空機である。そして最後に続く支援機も、安心と信頼のドイツ製航空機。

その名は「リピツシュ P. 13a」三角形のような形をしたドイツの迎撃戦闘機だ。予定ではマツハ 2.5 を出す頭おかしい（褒め言葉）デルタ機になるはずだったが実機は生産されていないそうだ。

武装は不明で、友軍としてやってきたものの、俺のスマホスベックでも非武装のジェット迎撃機として登録されている。

神様は何故、こいつを友軍機として選んだのか。その真相はいまだに分かっていない。と言うか知りたくもない。

以上が神様から送られてきた友軍機なのだが多分、二度と実戦に出る機会はないであろう。

友軍機の収納に多少困ったが、ひとまずカレイジャス意外の各艦に着艦させ甲板上で待機してもらおう事にしたのだが……錬度が低かったのか、それとも幅が収まりきれなかったのか少なくとも数が樹海の肥やしになった。

友軍機の収納を持って、俺は彩雲作戦の終了を宣言し前衛でフルボッコにやられている空中艦隊に撤退命令を出した。

最大戦速で逃げたかきもあり、当時残存していた約半数が撤退に成功した。

と言っても6隻しか居なかったが。

6隻が俺が居るところまで後退するとこの樹海化と呼ばれる現象が消え、また香川に戻って来た。

戻って来た際、確保していたはずのコンビニ弁当がいつの間にか消滅していた。俺は軽くなつていく財布に恐怖を覚えながら弁当より安いおにぎりを購入した。

帰り際に、今回獲得した友軍機の運用方法を考察していたがどれも現実味がないため脳内プランで終り結局結論の出ないまま拠点となるホテルについてしまった。

「こいつらが空を飛んだら……彼女達はどんな反応をするのだろうか……」

自室に戻った途端、俺の脳裏にはそんな小もない疑問が浮かんだ。神様、お願いですから次に友軍を送るときはもう少しまともな航空機を俺に恵んでください。

出来ればフォックケウルフみたなのをお願いします……。

次の作戦まで

先の戦いから数日余りが経過し、俺の財布も雀の涙ほどになった今日この頃。この日、珍しく神様から一本の電話が入った。内容は現在の財政状況や今後の勝算の見込み。次の作戦までに失った兵力の再建は可能か否かといった割と真面目なお話だった。

財政は最悪で、勝算の見込みは今の所無し。兵力にいたっては艦隊は壊滅し、残存部隊と言えば神様から貰った頼りなさそうな航空機郡。そして最も消耗するであろう陸上部隊。戦車を中心とする機甲化大隊の皆さんが今の現有戦力と言っても差し支えない。

この最悪な状況を神様に伝えると、向こうはこう言ってきた。

「えっ？ まだそんなに戦車が居るのなら充分に戦えるでしょ？ 馬鹿なの？」

上からの無茶苦茶な命令。俺じゃあなかつたら確実に失敗しちゃうね。

まあ、そんなこんなで電話は向こうから一方的に切られる形で終り俺は次のXデーが近い事を同時に悟った。どうやら神様はこの状況でも充分に勝てると思うどこから来たか分からない多きな自信をお持ちのようだ。

樹海と呼ばれる特殊な戦場で、戦車は果たして実力を活かしきれぬのだろうか。勿論、状況次第では上手く立ち回れるかも知れないが生存率はあまり期待できないであろう。

木の根のような物が張り巡らされ道らしい道がない戦場で戦車が高速で動き回りつつ射撃をするなんて……とても想像しにくい。

しかも俺が持つ戦車は全て第二次世界大戦時に活躍した物ばかりだ。これが現代戦車ならもう少し上手く立ち回れたのかも知れない。

WW2の物は一旦静止してからの射撃が主流で走りながらの射撃は少々無理がある。勿論、出来ないと言うわけではないが命中率は著しく低下するであろう。

「……戦車かあ」

今まで全くと言ってても良いほど想定していなかった戦術が今、実行に移されようとしている。本作戦で支流となるのはWW2で活躍した世界各国の主力戦車達だ。

だが、不幸な事に神様は戦車の使用台数にまで制限をかけてきやがった。

「戦車の上限数は1戦中200両まで。それ以上は禁止とする」

戦車の群れでベルリンの壁を作ろうとした俺の計画は此処で立ち消える事になった。くたばれ神野郎。

かの「クルクスの戦い」では約8000両近い戦車が激突し激しい戦車戦を繰り広げた事で知られている。俺も何時かこれほどの大兵力を一度に動かしてみたい物だ。

だが、愚痴を言っついても悪戯に時間が過ぎ去っていくのみだ。俺は深い溜息を吐きながら次の作戦を練る事にした。

作戦を練る最中、神様から一本の電話が再び入った。

「ウツス、元気にしてるかー？ 壇上、次の侵攻が近いぞー。次の侵攻は一週間後の5月17日だ！ それまでに準備を済ませとけよー！ じゃあなー！ 期待してるぞー！」

またしても一方的に切られ、俺は今年のカレンダーに注目した。5月10日の今日。艦隊は未だ復旧の見込みはなくやはり作戦当日となる5月17日は戦車による地上戦が中心となってくるであろう。

状況が刻一刻と変わる中、俺は頭を抱えながら神様から貰った樹海内の地図を見下ろした。一面、木の根に覆われた整地されていない土地。

使用可能な戦車は合計200両程度。もしくは未満。

火砲は恐らく上限自由であると信じたいが戦場は限られ運用数も少数程度だろう。航空機はたんまりあるが肝心の対地攻撃機が十分。

持てる対地攻撃機と言えソ連の「Iー2シユトウルモヴィーク」が精々35機あるかないか。何故ソ連機なのかは俺もさっぱり分からないが対地支援機はこれが主力となる。見た目と性能は申し分ないがな。

自走砲についてはドイツのヤークトパンターが15両。ヤークトティーガーが20両。ソ連のSUー100Yが15両の計50両。これらは全て神様が定めた兵力である。

戦車については後ほどに語られると思うが、5月17日の戦力は以下の通りになる。

戦車200両、自走砲50両、航空機35機。

その他の戦力としてアメリカ軍M20装甲車が30両。ドイツ軍80cm列車砲1両。そしてドイツの突撃砲が13両程度が全戦力だ。見事な多国籍軍である。

確かに大規模な戦力ではあるが、上手く使わなければただの鉄くず同然となる。

俺は日夜、これらの戦力を上手く活用するための準備や作戦を練った。

作戦が成功すれば、俺は神様から金銭などの報酬を受け取る事が出来る。生命線のためなら徹夜も辞さなかつた。

やがて1週間が過ぎ、俺はこの作戦のために万全な備えを固めた。

地震速報のような警報が鳴り響き俺は息を呑みながら戦いに覚悟を決めた。

101高地は燃える。

警報が鳴り止んだ頃、視界一面に広がるのは木の根が覆う摩訶不思議な世界。人はこれを樹海と呼ぶ。神樹様と呼ばれる向こう側（勇者達）の神様が香川本土を守るために創造したのがこの世界だそうだ。

木の根は大小様々で遮蔽物や茂みなどは一切ない。

スマホのディスプレイには幾つかの光点があるが、これは両軍の位置や状況を表している。青が我々で、赤い光点が彼女ら勇者と言う事になる。赤い光点は僕に取って敵を意味する。そしてこの青い光点を操作するのが僕の仕事だ。

今回の作戦概要として先ず上げられるのは自称神様が定めたあるポイントの奪取にある。今回の作戦内容はポイントを目指してひたすら前進する事にある。

樹海全体に太鼓の音が鳴り渡り、これを作戦開始の合図とした。太鼓の音と共に、戦車隊の先鋒を務めるドイツの「IV号戦車」が16キロでポイント目掛けて前進する。樹海は複雑な地形ゆえ当初予定していた速度を出し切れずにいた。今の所、16キロが最大速度となっている。これが整地されていれば38キロは出ていたはずだ。

最初の奪取ポイントとして挙げられたのは通称「101高地」と呼ばれる小高い丘が選ばれIV号は丘を目指して突進する。

IV号はこの戦いに20両が参戦し、「第一戦車中隊」として勇者達と最初の一戦を交わす事になる。

IV号ら第一戦車中隊が101高地を目指して前進する頃、別方面から30両の戦車部隊が作戦に乗っ取って101高地目指して前進した。

III号突撃砲で編成されたこの部隊は「突撃中隊」として101高地を目指す。別方向から進軍するのにはわけがある。

この突撃中隊は、右翼から101高地を目指すわけだが、途中道を逸れて別地点に設けら「102中継地」奪取へ向かわせる。50両で攻めるように見せかけて本隊は別の奪取ポイントへ強襲をかけるのだ。

102中継地は木の根のワールドにこそ変わりはないものの、他の土地より平たく戦車にとっては理想的な戦場になる事間違いない。

101高地及び102中継地奪取が今作戦の第一歩だ。

「マスター、101高地へ向かう第一戦車中隊が先回りしていた勇者の先遣隊と交戦に入りました。指示をお願いします」

こいつは俺のスマホにいつの間にか導入されていた会話型AIだ。作戦の進捗状況などを逐一報告してくれる便利な奴。女性のような声で俺は勝手に「マスター」と呼んでいる。正直、言われて嫌な思いはこれっぽっちもない。寧ろ続けてどうぞ。

話が逸れたが、先ほど先鋒として突撃していったIV号を中心とする第一戦車中隊20両が勇者の先遣隊と交戦を始めたそうだ。

相手の勇者は五人。そこへ20両のIV号が攻撃を開始する。

機動力に勝る勇者達は巧みな動きでIV号を次々と撃破してゆく。撃破されたIV号は跡形もなく吹っ飛ばか、沈黙するかで判断される。

最も、判別がややこしいため大半は木っ端微塵に破壊される。正直、どうやって鉄の塊である戦車を剣や鞭で破壊しているのか。それが気になって仕方がない今日この頃。

現状、105高地の戦況は五対十一。IV号は勢いよく爆散し、これではマズいと思った俺は102中継地を目指していたIII号突撃砲のうち10両を増援に向かわせた。

指定されたIII号は方向を転換し、背後に立つ101高地目掛けて突撃を開始する。

これで102中継地に向かうIII号突撃砲は20両となり、戦力は当初より大幅に低下する見込みとなった。

「持ってくれよ……突撃砲」

目の前をゆっくりと前進する重戦車郡を眺めながら俺は突撃砲に一途の祈りを託した。彼ら突撃中隊が目指す102中継地は目前に

迫っている。

冬の雄叫び作戦（前半戦）

あれから数刻が経過したが、101高地の戦況は絶望的と判断しても良い。現に101高地は勇者の増援が目撃され、101高地で奮闘していたIV号戦車は軒並み破壊。もしくは大破したと言う。間に合わなかったIII号突撃砲は勇者の待ち伏せによって10両中8両が撃破された。

残りの2両は全速力で離脱したがその損害はあまりにも大きい。2両は101高地を諦め、本隊である突撃中隊20両と合流しこれで合計22両となった。

こうして、IV号を中心に編成された第一戦車中隊20両はその全てが大破。壮絶な最期を迎え全滅から二十分後に部隊が解体された。

IV号の犠牲からしばらくして、102中継地を目指す突撃中隊と既に足を踏み入れていた勇者との間で最初の戦闘が勃発する。

101高地を諦めた俺は至急、上空で作戦待機する第一航空艦隊に102中継地を爆撃せよと命令を発し、ソ連のI1-2が編隊を組み空を爆走する。ついで密かに射程圏内へと移動させていた第一自走中隊50両に102中継地への支援射撃を命令する。

種類が異なる50両の自走砲が一齐に砲撃をはじめ102中継地は煙で見えなくなる。だが、これが仇となったのか、自走砲が駐留するポイントに勇者数名が潜り込みこれに壊滅的な打撃を与える事となる。

発砲地点を観測されていた自走砲部隊はなすすべもなくその全てが破壊され、継続的な支援砲撃は不可能となった。

一方、壊滅した自走砲部隊と連携して地上への爆撃を行った第一航空艦隊は帰還中、大空を飛ぶ船のような物に乗った勇者と遭遇する。

爆弾層を空にしたI1-2隊長機は独断でその勇者と戦闘をはじめ、うち半数は生きて帰らなかった。制空権は既に掌握していたはずだったのだが性能は相手が勝り隊長機はその船のような物体に自ら体当りを仕掛け未帰還となる。

当時35機のI1-2がこの爆撃に参加したのだが、生きて帰った

機は13機とその半分にも満たなかった。

「おお、繋がった繋がった。どうじゃ、ポイントは一つぐらい確保できたかのう？」

電話中、俺が立っている地点から少し離れた場所になんとも言いがたい流れ弾が飛んできた。これは勇者が放った物ではない。恐らく味方からの誤射であろう。戦局は相変わらず苦しい状況に置かれている。

「ダメです。一つも取れません。せめてもう少し爆撃機を此方に向かわせてください。爆撃機がダメなら戦闘機でも良いです。空軍が圧倒的に足りません」

こうして居る間にも102中継地を含めた各地の戦場では1両、また1両と前線へと赴いた戦車が破壊されてゆく。戦車が足りなくなった現在、戦場での主力は火力の足りない装甲車や命中率が極端に低い80cm列車砲が必死に応戦している。

既に装甲車は16両が葬られている。その大半は駆けつけた青い勇者によって真つ二つにされたと言う。

「それはお主の指揮能力がイマイチ足りていないからではないかのお。ワシが手当てし部隊はどれも精鋭揃いじゃったはずじゃが？」
「中戦車はほぼ全滅。突撃砲も残り僅かです。現状、無傷で戦場に向かっているのは作戦の要となる重戦車部隊のみですよ。彼らが壊滅すれば本作戦は確実に失敗します。当然、失敗すれば僕の命はありません」

「命がないと言うのは少し盛りすぎじゃあないかのお？」

「収入源のない人間なんて風前の灯です。食費が尽き始めた現状を打破するにはやはり、空軍の支援が必要不可欠です」

「重戦車部隊が健在なんじゃらあ？ なら何とか」

「空軍の支援がどうしても必要不可欠なんです！ 神様も空軍の重要性ぐらい良く理解して居るんでしょう!?」 せめて後40機近くのジェット戦闘機の使用を認めて頂きたい。それが嫌なら60機の爆撃機をお願いします。旧式でも構いません」

「そんなの承認してしまつたらワシの身体が持たんだろう！ 絶対に認められんわい！ 言つとくが、お主が兵器を自在に操れるのもワシの体力あつてこそなのじゃぞ」

数に制限がある理由はこれの事だつた。これらの兵器は全て神様の体力から搾り取られて自由自在に行動している。いわば神様の体力が彼ら兵器の燃料。ガソリンなのだ。確かに無茶を言っているとは思うが、戦力増強が認められなければ本作戦は間違いなく失敗する。そして収入はゼロだ。

「ではせめて数十機の運用を許可させてください」

「現戦力で精一杯じゃ。壇上よ、現有戦力で対処しなさい。以上！」
「あつ、ちよつと待てよ！」

一方的に切られてしまつた。最後は我を忘れ敬語ではなく暴言を吐いてしまつた。増援は認められず現有戦力は常に減る一方だ。

前線で奮闘していた装甲車50両は電話時間中に全滅し80cm列車砲は後退を余儀なくされている。IV号突撃砲は80cm列車砲の後退を支援するためその殿を務めている。壊滅は時間の問題だろう。

突撃中隊までもが壊滅した今、俺が持つ現有戦力は非常に限られた物となつた。

俺にとつて希望の光となりうる部隊は最早、激戦区へと向かう重戦車100両のみとなつた。俺はこの重戦車に最後の望みを託す。

重戦車が激戦区へ向かう中、再び半壊した第一航空艦隊に出撃命令が下つた。

冬の雄叫び作戦（中盤戦）

いまだに重要拠点を一つも確保出来ていない中、俺の命を受けて前進中だった第二戦車中隊50両が勇者と接敵した。だが、接敵したのは50両と言ってもごく一部の6両のみである。この第二戦車中隊の主力はソ連とアメリカの戦車で構成されていた。

ソ連からはT-34中戦車30両。そして、アメリカからはM4シャーマン20両が参戦している。双方ともに有名な車両ではあるが、有名だからと言って最強と言うわけではない。連携が取れなければただの鉄くず同然である。

この時、一部の勇者と接敵したのはM4シャーマン6両。戦車部隊の右翼前方を担当し周辺の警備に当たっていた。彼ら第二戦車中隊の目標は手薄になっているであろう106平野。

地形は相変わらずだが他と比べて平地が多く戦車にとつてはともありがたい重要な地形の一つだ。当然、此処の奪取に成功すれば報酬として10万円が与えられしはらくは生活に困る事はない。

だが、戦車中隊が勇者と接触したのはその106平野より数百メートル離れた場所で地形は最悪。まさに荒地と呼ぶに相応しい。

シャーマン6両はこの時、三人の勇者と戦闘を開始した。

紫色の勇者服を纏う二人の少女が立て続けに3両のシャーマンを葬った。激戦は此処から始まった。

槍持ちの少女も2両のシャーマンを葬り、生き残ったシャーマンも後に大破する。

50両と言う規模に驚いたのか、彼女らの戦力が少しずつ第二戦車中隊に注がれていく。一人増えるたびに3両がやられついにシャーマンは2両にまで討ち減らされる。シャーマンを守るため二次大戦でも同盟関係にあったソ連のT-34が突破口を開かんと前進を開始する。

既に15両を失いながらも中央突破を図るT-34にシャーマンも後に続いた。

彼らの目的地は106平野。此処を奪取するための中央突破だ。

ポイントを占領するには最低でも5両の戦車が目的地に留まらなければならぬ。5両の戦車が10分間そのポイントに居座る事が出来れば自動的に此方側の勝利になる。

106平野に14両のT-34と2両のシャーマンが突っ込む。既にT-34は1両失ったようだ。失った仲間のためにも彼らは106平野を目指す。

1

106平野を目指す中、空から支援の手が差し伸べられた。生き残った計16両の戦車を助けるべく13機のI-12が勇者に対し決死の空襲を敢行した。だが、爆弾を命中させた機は少なかった。

奇襲攻撃ではあったが思いのほか戦果が挙がらず返って返り討ちに合うケースが急増した。出撃した13機中生きて帰ってきたのは僅かに3機のみだ。

10機がこの戦いに散り数発は味方に対し注がれた。

2両のT-34が味方の誤爆を受け大破したのである。とんだ失態だ。

だが、生き残った14両の戦車が無事に106平野へとたどり着いた。

後は此処で10分持ちこたえてくれれば此方の勝利である。

「おおー！ 行った！ 戦車が106平野に行きよったわい！」

勝手に切ったかと思えばまたかけて来た自称神様。何処か楽しそうな様子でこの戦いを見守っているようだ。

「そうじゃ！ 頑張つて持ちこたえるのじゃ！ 10分！ 10分持ちこたえれば良いのじゃ！」

まともな遮蔽物がない分、味方の車両はどんどんその数を減らしていく。1両、また1両と煙を上げ降伏の印である白旗を揚げる。106平野内に勇者が入り込み戦局はやはり劣勢だ。

現在11両。うちシャーマン1両。生き残っていたもう1両のシャーマンは此処で力尽きたようだ。

「クツ……間に合いそうにないか……」

最悪な戦況下、生き残っていた1両のシャーマンがついに倒れ煙を吹きながら白旗を揚げた。此処に投入された米軍は文字通り全滅し今、戦線を支えているのはソ連戦車T-34。

残存兵力は僅かに7両。

「何じゃ!? まだ後6分も残っておるぞ! まだまだ根性が足りん! 耐えるのじゃ!」

見事な負けっぷりにさすがの神様もついに焦りだした。事の重要性に気づいたのか、神様は声を上げ狂ったように精神論を言い続ける。さすがに迷惑極まりない。

「どうするんじゃ! 壇上! このままじゃあ全滅するぞ! どうするんじゃ!」

焦りを散らせる自称神様。だが、此方にはまだ最後の切り札が残っているのだ。平野内に陣取る戦車が残り5両を切った時。

平野内に爆音が響き渡った。

冬の雄叫び作戦（終盤戦）

砲弾は西からやってきた。5両の殲滅にかかる勇者達もこの砲撃に気づき皆が西の方角に視線を向けた。西はとても複雑な地形が広がっており戦車の進撃を大きく妨害する。

勇者の誰もが此処を突破してくるとは思ってもいない。現にその方角から大量の重戦車郡がやってきたとき、皆の顔は愕然としていた。

この重戦車郡は常に前進を続けていた第一重戦車大隊100両。生き残った中戦車5両を葬ろうとしていた勇者は僅かに五人余りだ。

「ちよ、ちよつと！ 向こうから大量の戦車が溢れてきているじゃない！」

「……へ？ 西から？」

赤と黄色の勇者が何か揉め事をしているようだ。思い込みほど恐ろしい物はない。

しかし俺はただ歴史の真似事をしたに過ぎない。モデルとなったのはかつてナチスが実行した「赤色作戦」である。

赤色作戦とは、「アンデヌスの森」を戦車で突破するために発動された有名な作戦である。フランスは突破できないであろうと確信していたがナチスはこれを突破。マジノ線を越えて最終的にフランスを降伏させたのだ。

当時、赤色作戦で使用された戦車はI号戦車やII号戦車などの快速戦車が主体であった。だが今回は厚い装甲を纏った重戦車ティーガーが中軸となっている。

「な、なんじゃ!? あの複雑な地形から大量の重戦車が!」

電話越しでも伝わる神様の焦り具合。良い感じだ。

一方、勇者達は前進する重戦車に接近し各々の武器で応戦しているようであるが、撃破できているのは精々2両から3両といったところであろう。

ティーガーの前面装甲は大変分厚い。

その前面装甲は110mm。側面と後面は80mmで覆われている。

一番薄い装甲は上面と下面の20mmであるが此処を攻撃するのは至難の業であろう。

ティーガーはあの複雑な地形でも20キロを出し突破した。これが整地になると最大で40キロの速度が出せる。

複数のティーガーが整地に入り速度を次第に上げていく。

全長8.45m、車体長6.316m、全幅3.705m、全高3m、重量57tのティーガー戦車隊がパンツァー・カイルを築き106平原を目指して速度を上げていく。

勇者はこれになす術もなくひたすら退却を繰り返す。

逃げる勇者にティーガーは主砲の56口径8.8cm KwK 36 L/56を用いて追い討ちをかける。最大で92発放つ事が出来るこの重戦車はまさに希望の光と言えよう。

今の彼らにはパンツァー・リートが良く似合う。

勿論、この100両全てがティーガーとは限らない。主力であるティーガーが合計で60両。しかし残りの40両はソ連製戦車である。

後続に続くソ連製戦車はあの有名な「IS-2」だ。

全長9.90m、車体長6.77m、全幅3.09m、全高2.73m、重量46tの重戦車である。あだ名はスターリン重戦車。速度は37キロを誇る。

前面装甲は100から120mmで側面90mmに後面60mmだ。主砲は122mm戦車砲D-25Tを用いている。

ソ連戦車にはロシアのカチューシャかモククワ防衛郡の歌が似合うであろう。それともソ連国歌か？

ともあれ、2種類の重戦車は迫る勇者をたやすく追い払いほぼ無傷

の状態で106平野に進出する。やっぱりこの二国の戦車は格が違いますわ。

増援に何人かの勇者が追加されたが、やはりその前面装甲に敵うはずもなく敗走を重ねる。

「やっぱり戦車は固い！ 重い！ 強い！ 三拍子が揃ってないといかんのぉ！ ハハハハ！ この重戦車郡に敵う勇者など、もうこの世には居まい！ ハハハハ！」

突然の逆転劇に神様がついに壊れた。

106平野はティーガーとスターリン重戦車で埋め尽くされ生き残ったT-34とシャーマン1両は同地域で健在だ。

100両近くの戦車が10分間、円形状に陣を引き耐え抜いたため106平野はようやく陥落。ようやく俺の財布に10万円が舞い降りた。

占拠後、戦いは局地戦的な物になった。

あの日本刀らしき物を装備した青い勇者が現れる事もなく樹海化が解け俺はようやく、あの戦場から解放されたのだ。

冬の雄叫び作戦はこうして成功と言う形で幕を下ろした。

戦車の損失は極めて高かったものの主力である重戦車郡はほぼ無傷の形で終結を迎えたのであった。

足組みは築かれた

冬の雄叫び作戦から約三週間。

俺は今、某ホテルの一室にて次なる作戦を練り上げていた。ベットのの上に樹海化した地図を広げマーカーペンを握る。

「A地点からB地点までの距離はおよそ1キロ……B地点からC地点までの距離は直線で行っても3キロ……」

偏見と予測を積み重ね、俺は地図上に大まかな数字を書き記した。数字はそこまでの距離を表しマークされた地点は次なる奪取ポイントとして記録される。

この地図は戦いの後、戦利品として神様から受け取った副産物。俺はその副産物にありとあらゆる情報を詰め込んでいく。

地図があつてこそ、始めて戦略と言う物は動き出すのだ。だが、俺に取って“樹海”は広大すぎる戦場。遮蔽物が乏しいのが痛いところだ。

「……だったら自分で遮蔽物を作り出せば良いんじゃない？」

途端、俺の脳内に何かがピンと来た。

―遮蔽物がないのなら、自分で作れば良いじゃない。

一旦決意した意思は止まる事を知らなかった。戦える程度まで戦力を整えた空中艦隊は今、メンテナンスに入っている。

第一から第三艦隊にまで揃えあげたその勇姿は今、地下に眠っている。出撃に備え念入りなカスタマイズを行い万全を期すのだ。

この地下基地は依然として勇者の知らぬところに存在する。

場所は香川沖の瀬戸内海。俺は、昨日練り上げた計画を実行に移すべくこの地下基地を訪れていた。

「さすがにまだ陰も形もないか……」

地下基地の隅っこにまだ骨組みだけが築かれている巨大な物体がその場に佇んでいる。それが何個、何十個と縦に並び組み立てられていた。

枠組みだけ見れば隕石のようにも見えるそれは艦隊の盾となり矛にもなる。

「後に『トロイの巨石』として命名されるお前達が今後の命運を分ける『鍵』となるだろう。そしてお前が俺の運命を分けるのだ」

数十メートルもある『巨石』と名づけられたこの物体は静かに壇上を見下ろしていた。無人の工具達が周りを囲い粛々と作業に励んでいた。

計画はゆつくりと確実に進み五日後にはついにその姿を壇上に映し出す。

「おお、壇上？ 調子はどうじゃ？ そろそろ次の戦いに移行するぞ」

あれから一週間。何時もと変わらぬ朝に神様は通話を此方によこした。戦いの準備は済み、後は来る戦いに備えるのみだった。

スマホ越しに発する神様の言葉を耳にした俺は、やがて勝利を確信する。

「良いか？ 次の戦いは今日の正午。ピッタリに始める。食事は早めに済ませておくように」

「了解」

そうやって俺はスマホの通話を切ろうとしたその時、神様は最後、一言添えて俺に問いかけてきた。

「壇上……艦隊の備蓄は充分か？」

何処かで聞き覚えのある台詞を聞いた途端、俺は考える間もなくこう答えた。

「大丈夫だ……問題ない」

多国籍過ぎる初夏の風

神世紀3000年6月2日正午。

この日、俺史上最大の作戦が今幕を開けた。

その総兵力は150隻に昇る空中艦隊を筆頭にかき集めた戦車60両。自走砲は11両に達し列車砲が新たに3両加わる。

航空支援は神様の手厚い支援によって一気に60機近くまで増大。更に、第二艦隊は機動艦隊として機能するためその数は160機にまで膨れ上がる。

また、小惑星のような塊も戦力として数えられその総数は10個に達する。

これは防衛、攻勢どの面においても優れている壇上必殺の秘密兵器。本作戦が初陣でその有用性が試される。

更に、本作戦に備え神様が攻撃ヘリコプターを壇上に寄与。その数は22機に昇り、機種は初期型のAH-1コブラである。

戦力は整い、後はがむしあやらに前進するだけだ……。

「……いよいよじゃな。壇上」

電源が入ったスマホから神様の音声が入る。

何時もより緊迫した声に、俺は神様も本気なんだと察した。

眼下に広がるのは作戦待機する数多の部隊。種類や役目は違えど、その任務はみな同じだ。

「……ではこれより、『青嵐作戦』を発動する！ 全軍、前進せよ！」

号令とともに、戦車のエンジンが入る。1両が先陣を切り、後続がキヤタピラ音を響かせながら所定の位置に就いた。

戦車の主力はドイツの重戦車ティーガーである。

60両のうち20両を占めるティーガー戦車隊は巨大なパンツァーカイルを組み左翼の戦線へ躍り出た。

一方、20両のパンター中戦車はその機動力を活かして勇者の索敵に入る。今回の作戦に軽戦車はおらず、彼らの目は一挙にパンターが担う。

本作戦に投入されたパンターはF型である。

先陣の戦車部隊に続き、後続には前線火力支援部隊が後に続く。

10両ずつのヤークトティーガーとヤークトパンターがティーガー部隊の援護に回り一路西部戦線を目指した。

布陣は戦車部隊の後方であるが、その持てる火力を惜しみなく投入し、ティーガーの前進を援護する。

そして当然、ティーガーの援護は駆逐戦車のみには留まらない。

ドイツの自走砲グリレが所定の位置に駐留し、勇者は居そうな予測ポイントに対し激しい集中砲火を浴びせた。

が、予測ポイントのため当然命中弾はゼロ。

……弾の無駄遣いである。

また、自走砲はこのグリレのみ。数も少ないため、全て左翼の戦線に投入している。

グリレの無駄撃ちタイムの間、列車砲部隊はその場で鎮座し時間の掛かる発射準備に入っていた。

運ぶためのレールがなく、荒地である樹海のため列車砲はスタート地点から動く事が出来ない。

だが、列車砲の射程は保有する全ての兵器の中で随一を誇る。方角は指定できないものの、その超射程で味方を出来るだけ援護する。

恐らくは味方の撤退時にその威力を発揮するであろう。

ちなみに、1発発射するのに掛かる時間は早くて6分。

長い。

普通に長い。

一方、本命の空中艦隊は中央よりの戦線に布陣し小惑星のような塊

も運用された。

中央には60隻からなる第一艦隊が布陣しその旗艦は戦艦「フィリブス・ウニティス」が着任。その艦名の意味はラテン語で「力を合わせて」を意味する。

そして右翼の前線に投入された40隻に昇る第三艦隊は旗艦に戦艦「ニューヨーク」を着任させ主な国籍はアメリカで統一させる。

所属する艦名は無論アメリカにちなんだ物だが、中にはその同盟国の名前もちらほら拝見できる。

さて、第二艦隊の機動部隊は旗艦を戦艦「オーストラリア」とし、空中母13隻を中核とした50隻で構成される。

艦名は日米英豪仏など、殆どが連合国で占めている。

また中には短期間で建造された護衛空中母なる艦種が存在し、こちらは13隻のうち5隻を占める。

また、航空兵力を高めるため中には航空巡洋艦的な空中戦艦も存在し、先述の160機から200機に膨れ上がった。

この航空空中戦艦は後部が飛行甲板となっており、4隻が本作戦に参加している。

だが搭載数はそれぞれ10機のみ。

搭載機は艦載機であるF6Fヘルキャット。

航空空中戦艦のネームシップは「伊勢」である。

神様の航空機はイギリス空軍のスピットファイアが60機。

俺は思う。

何故、今の今までこのまともな戦闘機をよこしてこなかったのかと。

しかし、この青嵐作戦は少し多国籍過ぎないだろうか？

戦車はドイツが占め、空軍はアメリカやイギリス。そして記述にはないが日本機も主力として参加している。

艦隊の艦名も豪州から欧州。そして米英日。

もういつその事、作戦名を「多国籍の祭り作戦」に改名してやろう
と思った今日この頃。うん？ この作戦名なんか語呂良くね？

「何をしておる壇上！ 左翼の戦線で何か動きがあったようじゃぞ
！」

作戦名の改名を考えていた中、ついにドイツ戦車隊が前進する左翼
で戦いの火蓋が切って落とされた。

青嵐作戦―前哨戦―

左翼をひたすら前進していた戦車部隊は遂に勇者の先遣隊と接触した。突出してきた三人の勇者を迎え撃つのは20両のティーガー戦車重隊。先頭を行く3両のティーガーは本作戦の初戦を飾った。

ティーガーの正面装甲はおよそ100m。俺の勝手な予想では、この分厚い装甲によって彼女らの持つ武器は簡単に弾かれてしまうだろうと……慢心していた。

「戦車前進！ パンツァーフォー！」

交戦開始の情報を得た俺は、左翼で戦う全戦車に対し前進を命じた。目標は神樹と呼ばれる巨大な樹木の一步手前。そこを約20分占領し続ける事が出来れば此方の勝利となる。そのため今回は陸路と艦隊の空路で神樹を目指す。

青嵐作戦一番の難所はやはり陸路であろう。勇者との接敵が一番多く、その分損害も甚大になる。そのため、戦車の主力は装甲の固い重戦車が選ばれた。

速度の速い豆戦車も本作戦に参加予定であったが、貧弱なその装甲が参加を阻み断念した。豆戦車は……そうだな、陽動や裏工作。そして妨害や偵察ぐらいなら使えるだろう。だが、無駄死にはさせないぞ。

「壇上、勇者達の陣容だが……全員左翼に集中しているみたいだぞ？」

「……何？」

俺は高台から戦場を見渡すと、確かに爆煙の多くが左翼で揚がっている。中央や右翼の戦線には未だに戦鬪の火蓋は切られていない。

これは……右翼の艦隊を前進させるチャンスなのでは……？

「おい神様、今艦隊を右翼から前進させて一路神樹に向かわせよう」と

思うんだけど……どう思う？」

「それは壇上に任せるわ、戦術とか戦略とか全く知らないし」

「やっぱ神様より誰かロンメルかメツシを連れてきてくれ」

そんなやり取りを交えつつ、俺はおそるおそる艦隊を前に前進させた。一応、秘密兵器である小惑星郡が10個盾としてついている。

「……ダメじゃな。艦隊は側面から攻撃を受けておる。どうしたんじや、壇上、あの小惑星モドキ全く役に立っておらんぞ」

「クソツ、神樹は囿だったか。艦隊前面を左翼に向けろ！ 応戦する！」

弓や槍のような攻撃が前へと進む艦隊を迫真の演技で妨害する。その損耗率は幸いにも10パーセント未満で済んだが、撃沈された艦は少なからず存在した。

戦艦トリオンファンや戦艦ナイルもそのうちの一隻。

撃沈数は総計で約6隻に及び被弾した艦は総計11隻。

が、幸いにもその殆どが小破で済んだ。全く耐久性を上げておいて良かったぜ。

「小惑星郡は艦隊正面に展開！ 艦隊はその隙間から攻撃をしろ、出来るだけ弾幕を張るんだ！」

俺の指示通り、艦隊は小惑星郡の隙間から砲撃を開始し濃密な弾幕を形成した。その間、数十隻の巡洋艦を旗艦とした突撃部隊がひっそりと戦列を抜け神樹を目指す。

戦車部隊も自走砲や駆逐戦車の支援を受けつつ前へと進み、損害に躊躇する事なくひたすら前線の突破を目指した。

これに乗じて列車砲も無作為に砲撃を開始。敵の注意を逸らせる作戦に出て、小惑星郡も素早く展開した。

既に二つほど失っている小惑星郡だが、まだその壁は厚い。

「押セッ！ そのまま押セッ！ 目指すは神樹と呼ばれる巨大な樹木の占領だ！」

艦隊からこつそりと離脱した巡洋艦鞍馬を旗艦とした突撃部隊は、低空飛行にて一路神樹を目指した。

離脱できたのはこの鞍馬と随伴する突撃駆逐艦が僅かに7隻。

この8隻が無傷で神樹周辺を約20分占領する事が出来れば、俺の勝利は無事に確定し元の世界に帰還する事が出来る。

だが、俺は慢心しすぎた。

なにせ、その声が聞こえるまで俺は彼女達の存在に気がつかなかったのだから。

「見つけたぞ……大将……」

「……あ？」

迫真の時間稼ぎ

その声に、俺は思わず振り向いた。背後に立って居たのは日本刀らしき物を握っていた一人の青い少女。金髪を靡かせた凛々しい姿に俺は思わず目を奪われた。

……いや、奪われている場合だろうか？ 俺の背後に立ち、その距離は異様に近く感じる。彼女は今、仕事人のような視線で俺を見つめている。

“切られる”俺は直感的にそう感じ取った。

「アイエエエ！ ユウシヤ!? ユウシヤナンデ!? ヤメロー！ 死にたくなーい！ 死にたくなーい！ 死にたくなーいイイイ！」

「落ち着け、まだ切り落とすと決めたわけじゃあ……」

「切り落とす前提じゃあないですかーやだー！」

妙な空気が俺の居る指揮場に流れ込む。目の前には俺の行動（命乞い）に戸惑う刀を持った美少女と、状況を理解し、パニックに陥った一人の少年が阿鼻叫喚している。

だが、俺は狂った振りをして周辺を警備する戦艦の到着を待っていた。

今、俺に一番近い戦艦は三隻居てどちらもつい最近就役したばかりの最新鋭艦である。その戦闘能力はきつと、目の前の少女を上回る事であろう（慢心）

「……本当にお前が “奴ら” の大将なのか？」

「ドウシテドンドコド！」

「……大丈夫か？ 口調がおかしいぞ？」

迫真の演技は彼女を間違いなく躊躇させた。彼女は間違いなく、俺から発せられるオンドウル語や忍殺語を理解していない。

いけるぞ、工藤新一！ 俺はこの修羅場から無事に脱出してやるん

だー！ ……俺、実は元の世界に恋人がいるんすよ。だから戻ったらプロポーズしようと思って……それで花束なんかも買ったりして……。

〈警告！ 多数の弓が接近！ 壇上、ブレイクしろ！〉

「は……う？ アアアアアア!?」

危ねえ!?

今、足元が爆発したぞ?! 流れ弾か？ 俺はたまたま繋がった神様からの警告で命拾いしたが無視していたらあの爆発に巻き込まれるところだった。

畜生、艦隊の到着はまだか!?

「い……生きてる……ハッ、何だその攻撃はそんなもんか。えっと、今日は6月の上旬……ハハッ何とか今年のクリスマスまでには元の世界に帰れるかな」

「クリスマス？ 一体何を言ってる……ハッ!?!」

咄嗟、彼女はその場から一気に後ろへ下がった。

青いレーザー光線が彼女の頬を通過しその状況はまさに危機一髪。彼女の危機管理能力はどうやら、俺よりも一枚上手らしい。

俺の時間稼ぎは報われ、周辺の警備に当たっていた最新鋭艦が三隻到着する。

到着した戦艦グナイゼナウは戸惑っている彼女に対し発砲。しかし、先述した通りグナイゼナウの攻撃は華麗に交わされ本艦の位置は筒抜けとなった。

「クッ、外したか」

「……やはり、お前が敵の大将だったか」

攻撃を受け、俺の台詞を耳にした彼女は体勢を直ぐに立て直した。

そして、下に向けていた日本刀を再び俺の前に向けた。
戦いの火蓋はまさに、きつて落とされようとしていた。

「覚悟しろッ！ 大将！」

やがて戦いは終盤へ向かう

グナイゼナウの砲撃が外れてから約30秒、俺はあれから青い勇者の日本刀を何とか交わしつつ、後方に展開する三隻の最新鋭戦艦と合流しようとしていた。

しかし……。

「させんツ！」

「なっ!？」

青い勇者は瞬きよりも速い速度で俺の背後に立ち、後方で展開する三隻のうち一隻をその長い日本刀で文字通り真つ二つにしてしまった。

戦艦ペンシルベニアは丁度、その中央部に日本刀で入れられた亀裂が入り爆発がそこから充満するように発生した。また、中央部には命とも言えるエンジンが添えつけられており爆発はさらにその勢いを増す。

ペンシルベニアは戦隊の左翼を担当していたが、その現場は炎に包まれ残りの二隻も動揺を隠せずに居る。

「クソツ……」

俺はつい三日前に就役した最新鋭艦の沈没を目の当たりにし、軽く舌打ちをした。神様曰く、ペンシルベニアの建造費は112万円に相当すると言う。

戦艦にしては意外と安い……やはり、その大きさが原因か。

「……しづといな」

「ハハッ、それはお互い様だ、そっちこそそろそろ諦めて仲間の元に帰らないのか?」

「フン……笑わせるな」

一度刀を振り払ったかと思えば、再び俺に日本刀を向けた。銃の一つでもあれば応戦できたのだが、生憎今の俺にそんな護身用の武器はない。

武器らしい武器と言え、この「21歳拳」だが正直目の前に居る女の子を殴りたくはない。出来る事なら自分の手に掛けず、後続で展開する二隻の戦艦で仕留める……もしくはご退場願いたい。

拳だつて当るかどうかも分からないんだ。

「若葉ちゃん！」

「……高嶋か」

「応援に来たよ……つて人!？」

「……敵？」

しかも、状況は一気に一片した。『若葉』と呼ばれた勇者の奥からもう二人の勇者が応援にやってきたのだ。

一人は薄ピンク色の勇者服を身に纏った勇者。名前は『高嶋』と彼女たちの間で呼ばれている。

もう一人は赤紫色のような勇者服を身に纏ったクールぽいつ勇者。彼女の名前はまだ分からないが、彼女達の味方である事は一目瞭然だ。

対する此方は最新鋭戦艦二隻に俺一人。一応、奥に列車砲が控えているが近すぎて撃つ事が出来ない。

「君は一体何処から来たのー？ 名前は？」

「……それは答える前提か？」

「へ？」

「……HE？」

何だこのやりとり。

「高嶋さん、彼は敵よ。現に、乃木さんと殺り合っているじゃない」
「そんな事ないよ郡ちゃん！ だって、とても悪い人には見えないよ？」

「で……でも」

まさか高嶋と呼ばれている勇者は俺を味方だと勘違いしているのか？

後方で展開している二隻を無視して彼女は俺を味方だと断言しているのか？ 天然か？ それとも本気か？

だが、相手が本気と言うのならこちらとしては好都合だ。何せ、此処から離脱できるチャンスを窺えるからだ。

「ソウダヨ、オレハキミタチノミカタダヨ」

「じゃあ何故乃木さんと争っているの？ 敵なら争う必要はないじゃない」

「ソレワネムコウカラ戦闘ヲシカケテキタンダヨ」

「……それは違うな。私達に攻撃を仕掛けてきたのはお前だ」

「ウゾダドンドコドーン！」

「なら……彼方は敵ね」

「ま、待つんだ！ オホーツクババア……いえお姐さん」

「斬る！」

弁明しよう、俺は焦ったあまり口を滑らせてしまった。あれはたまに発動してしまう滑舌の悪い俺がたまたま発した言葉であって……。

「斬るッ！」

「ぐ、郡ちゃん!?!」

俺は、断じて悪くないんだ……！

「危ないッ！ 千影ッ！」

「郡ちゃん!!」

刹那、そんな俺のピンチを救うかのように何処からともなく緑色の長いビームが「千影」と呼ばれた勇者に真っ直ぐ吸い込まれるように突っ込んで行つた。

それも一つではない。五つ程度のビームが同感覚で千影に迫つた……が、反射神経が良いのかうち三発を華麗に交わした。

しかし、それでも残つた二発は彼女を直撃しようとしていた。

だが間に割って入って来た若葉がその日本刀で残り二発のレーザービームを打ち払つた。いや、その日本刀の耐久力はおかしいだろう。

「誰だ!？」

「若葉ちゃん! 郡ちゃん! あれを見て!」

「……あれは」

高嶋が言うように、俺は空を見上げた。

するとそこには、数え切れないほどの大群を率いてやってきた第三勢力の姿があつた。それは彼女達が戦つていたと言うバーテックスではない。

緑色を白色を基調とし、そのデザインはとても独特な物だ。また、主砲に砲身はなく回転式でお皿のようにも見える。

地球艦隊でもないその第三勢力は、周る砲塔をさらに回して俺らに対し攻撃を仕掛けてきたのだった。

青嵐作戦は次の局面へ

「高嶋さん！ 今度はそっちに行ったわ！」

「へ？ うわうわ、何か一杯来た!？」

「後続の二隻は上空に展開する多数の艦艇に対し砲撃を開始！ 指示あるまで各個撃破に専念せよ！」

ペンシルベニアを失った後続の二隻は俺の指示に従い、主砲の標準を三人の勇者達から上空に展開する第三勢力に切り替える。

そして戦艦グナイゼナウ及び戦艦クイーン・エリザベスの二隻は上空の敵に対し前部の砲塔を用いて応戦した。

グナイゼナウの主砲弾は攻撃を仕掛けてきた敵の駆逐艦らしき艦艇を撃破。続けて後続に控える二隻の同艦種を葬り去る。一方、クイーン・エリザベスの方は多少外すも冷静に照準を定め同様の敵駆逐艦一隻を撃沈する大戦果を挙げた。

「何!? 敵が勝手に爆散しただど!？」

「若葉ちゃん！ あれはね、後ろの船？ が攻撃したんだよ」

「艦（ふね）……だど?」

困惑する三人を尻目に、二隻の最新鋭戦艦は迫る敵駆逐艦の撃破に集中した。以後我々は彼らを「敵」と認識し、全ての戦線から持てる限りの全戦力をこの場に投入した。

勇者達と消耗戦を重ねていった左翼担当の空中艦隊は彼らの出現を察知し、勇者らと応戦しつつ現場空域から一隻ずつ離脱した。

また巡洋艦クラマを旗艦とした水雷戦隊も樹海への突撃を諦め、俺への増援艦隊として進路を変更。時期に到達する予定である。

だが、艦隊が速やかに戦線を離脱していく中、思うように戦線を離れられない部隊が存在した。

それが、右翼戦線を支えるドイツ重戦車大隊及びその支援に当る自走砲部隊または駆逐戦車部隊だ。

また、道が整備されていないため容易に撤退しずらく、勇者に後ろを見せたらもれなく撃破あるいは行動不能にされてしまう。

「戦車部隊はしらばく時間がかかりそうか……しかし、盾となる小惑星郡がいればまだ勝機はあるか？」

「若葉ッ！ すまない、遅くなった！」

「球子か……いや、大丈夫だ。奴らは今、丁度現れた所だ」

「ちよつと何よアレ!? 幾ら何でも多すぎでしょ！」

「でもまだ何とかかなりそうだよ、〃アイツら〃の動きが変だなとは思っていたけどまさかこんな事になっていたなんてね。秋原雪花、ほどこに戦うよ」

「ほどほどじゃあ勝てない戦力なんですけどそれは……」

左翼の空中艦隊と激戦を交わしていたと思われる多くの勇者達が到着した。同時に、戦っていた空中艦隊も臨戦態勢を整え敵との対峙に備える。

そして、若葉は対象を早くも切り替え上空に未佇む多数の敵に対し人間とは思えないような瞬発力で空高く跳ね上がった。いや、人間じゃあねえわ。

他の勇者達も若葉に続けといわんばかりに人離れたジャンプ力を俺にまざまざと見せ付ける。

だが、二人の勇者だけはまだその場に突っ立ったまま此方を見つめていた。

槍を構えた紫色の勇者〃秋原雪花〃とさきほどから俺を疑ったままにいるクール系勇者〃千影〃である。まだ、彼女の本名は知らない。

「みんな飛び跳ねていつちやったけど……援護に向かわなくても良いの？」

「ごちとら装備が飛び道具なんでね」

「もしかしてそれ、使い捨て用の槍なの？ 投槍？」

「いやいや、しっかりとブーメランみたいに戻ってくるよ。それを上手い事キャッチしてもう一度敵に向かって投げる訳」

「何それ強そう」

俺と秋原……いや雪花と呼ぼう。雪花とのやりとりを、千影は鎌のよな武器を握ったまま此方にキツイ睨みをきかせていた。

どうやら俺はまだ、彼女に疑われているらしい。

……しかし、勇者達とコミュニケーションを取るようになってからあの自称神様からの連絡がずっと途絶えたままだ。

……もしかして、この自称神様。女の子相手にはコミュニケーション障だったりするのか？

風は静かに吹きすさぶ

左翼担当の艦隊が陣地にまで引き返し、陣形を整えつつ上空に佇む敵艦隊との交戦に備えた。再編中、何度か敵艦隊が陣形を崩しにやってきたが数的優位によつてこれを退ける事に成功。今のところ、損害はゼロに近い。

「しつかし、敵さんも数が多い事。全体で何隻居るんだろうね?」

「ガトランティスの売りは多分その数にあるんだろうね」

「ガトランティス? 何だそれ?」

「今上空で佇んでいる敵艦隊の総称さ」

「……何で貴方がそんな事を知っているの?」

……そうか、ガトランティス自体この世界には居ないんだっけ。

「僕が居た世界では結構有名な軍事組織なんだ。おそらくこの部隊はガトランティスの前衛艦隊なんじゃあないかな」

「前衛だけで……こんなに」

空はガトランティスの艦艇で埋め尽くされている。今、勇者達が戦っているのはガトランティスの駆逐艦ククルカン級。

ガトランティスの主兵装である輪胴砲塔は独特なデザインを持ち、発射するときは必ず回転しながら敵に対し攻撃を加える。

ククルカン級……もとい、ガトランティスの艦艇はその機動力を用いた戦法が大の得意で戦場を縦横無尽に駆け回る。

勇者達はみんな高く飛び跳ねて持てる武器を艦艇にぶつけているが、大抵はその機動力を用いられ回避されている。

そんな光景を地上で眺めていた俺は、不意に思いついた台詞を勇者雪花に提案した。小惑星郡を盾とした陣形も完成されつつある。

「なあ雪花。俺と一緒に戦わないか？」

「……はい？」

「どう言う事？」

投げかけられた予想外の質問に、二人の勇者は動揺し始めた。そして、その動揺はこの状況を静かに見守っていた自称神様にも大きく響いてやってきた。

『何を言っている！ 壇上！ 貴様は正気か!? 相手はあの勇者様だぞ?!』

「だからこそだ。相手はあのガトランティス。多分神様は不利になりつつある僕のために彼らを召喚したんだろうが……生憎僕は彼らと共に戦う気はなくてね」

『ワシと対峙する……そう言いたいのか！ 壇上!』

脳内に直接やってくる言葉に、俺も自分が持つ心の声で精一杯の返事を返す。

第二のプラン。それは、今この場に居る勇者達と共同戦線を張り突如として現れた強大な軍事国家 “ガトランティス” と戦う事。

まあ、彼女達が僕の案に賛同し一緒に戦ってくれればの話だが。

「彼らは今や我ら空中艦隊の戦力を裕に超えたのだ。あんな数で攻め入られたら命が幾つあっても足りやしない。脅威度は今や勇者から突然飛来したあのガトランティスに変更されつつある」

「だから貴方は私達と一緒に戦ってそのガトランティスと言う敵を撃退したい……と言うわけ？」

「そう言う事。それに、僕を味方にしてくれれば今後方で展開している多数の空中艦隊もセットでついてくるけど……どうかな？」

「向こうで戦っている戦車部隊はどうするの？ まだ、私達の仲間と戦っている状態でしょ？」

「後退させる。最も……もう間に合わないとは思うけどね」

20両近く居たティガー戦車隊は既にスクラップと化し、その多くが戦場で燃え尽きていた。自慢の主砲塔も力をなくしたように下を向き車体は酷い有様で放置されている。現在、11両の車両が戦闘を続行しているが生存する確率は極めて低い。

後続にて支援射撃を実施していた自走砲部隊は、既に戦線から撤退しガトランティスに対し可能な限りの有効弾を与えつつある。

だが、その自走砲部隊も幾つかは撤退中に木の根から落下し大破した。不正地であるが故に起きた悲しい事故である。

「タマっち先輩!」

「杏!?! どうしてこんな所に!?! 確か戦車と戦っていたはずじゃあ……」

「向こうの動きがおかしいなと思って此処まで駆けつけてきたの……それで……そちらの方は……?」

「例の戦車隊を指揮していた敵司令官様だ。だけど今は仲間になりたいたいと言って千影と交渉しているところだぞ」

「仲間になりたいって、どう言う事ですか!?!」

やはり、戦車部隊はもう既に壊滅したのかも知れない。

秘匿するは刃を構えた大嵐なり

戦いは確かに新たな局面を迎えている。テイーガーを中軸としていた戦車部隊との通信もいつの間にか途絶し、生き残った火力支援用の自走砲部隊は大きく撤退し新たな標的に対して可能な限りの火力支援を実施していた。

新たな目標。

それは突如としてやってきた彗星帝国ガトランティス艦隊である。

今の所、奴らの本拠地となっている彗星自体は見かけないものいずれこの地（しこく）にやってくる事は明白で今俺たちを襲っているのはその前衛艦隊に違いない。

前衛……寧ろこれらの艦隊は奴らに取っては使い勝手の良い「囷」ではないだろうか？ 戦艦コモンウエルス曰く奴らの戦力は我が方を軽く凌駕し、その総数は472隻と言われている。

……当然、この数はあくまで目安。レーダー上に納まりきらなかったうえに一隻一隻の規模も我が方を上回っているときた。まともに殴り合えば真っ先に俺が死に、奮戦している勇者達もいずれ同じ道を辿る事になるだろう。

まさに誰もが予想だにしなかった「緊急事態」とはこの事を指す。

「倒しても倒しても、数が多くて埒があかないぞ！」

「えつと……貴方が新しく仲間になりたいと進言している……壇上君……ね？ 私は勇者部部長の犬吠埼風。事態が事態だから歓迎するわ。仲間は一人数でも多い方が良いしね」

「俺の名前は壇上春男、よろしく。では、早速で悪いのだが今分かっている敵の総数は裕に450隻を超えている。そこで俺は兼ねてより秘匿していた秘密兵器の使用を貴女に許可していただきたい」

「……秘密兵器？」

この自称神様にさえ教えていない秘密兵器は、瀬戸内海の海底深くにある秘密ドックにてその刃を磨きつつあった。

“大嵐計画”と名付けられているソレは、新兵器『艦首統括速射砲』を搭載した最新鋭戦艦。その名もオライオン級戦艦の一番艦オライオン。

暗号名称は“O級戦艦”と呼ばれている。

現在この新型戦艦O級は瀬戸内海秘密ドックにて計24隻が就役。出撃準備を整えている。なお計画では本級を50隻増産する見込みで、さらに秘匿されている“マル追大嵐計画”では100隻に及ぶ建艦計画が日夜練り直されている。

俺の能力は「全ての兵器を自在に操る能力」であり、このような架空艦も決してその例外ではない。

だが、この“マル追大嵐計画”を持ってしても今、空を悠々と漂うガトランティスに対しては雀の涙ほどの戦力にしかならない。

我らにはもつと新しく、強力な巨大戦艦が必要である。

「……まあ、分かったわ。秘密兵器の使用を許可する。ただし、私達に対する誤射は決してしない事……いいわね？」

「勿論です。FF(フレンドリーファイヤー)は俺の好むところではない」

「じゃあ、とつととその秘密兵器を使っちゃって私達の部室に戻りましょう！」

「イエス、ママ」

最も、その勇者部部室に赴くのは今回が初めてとなるのですが……そこら辺はどう考えているのだろうか？

「……ああ……俺だ、直ぐに24隻のO級戦艦を出撃させる。場所は……言わなくても分かるな？ ……よし、出航などの手はずは現場に任せる。以上」

主むろに懐から取り出したスマホで瀬戸内海海底基地と連絡を取り、待機している全O級戦艦に対し出撃命令を出した。

果たして、戦局はこの一件でどちらに傾くのであろうか？

星舟はその勇者を庇うため

「マズいぞ、奴らは数に物を言わせて真っ直ぐ突っ込んでくる!」

「それも一つだけじゃあないよ、タマっち先輩! 群全体が一斉に襲い掛かってくる! 何とか阻止しなきゃ!」

「あわわわ、何か一杯来たよ!」

共同戦線を張ってからおよそ二十分余り。ガトランティスはその数に物を言わせ遂に一世一代の大攻勢に打って出た。今、この攻勢に耐えうる戦力は二桁の勇者達と生き残った地上の自走砲及び列車砲部隊。

そして、150隻余りの空中艦隊が現在の総戦力となる。ただ、この150隻に昇る空中艦隊も先の勇者戦没で3〜5隻余りが撃沈されており戦闘可能なれど僅かながら損傷を受けた艦も少なからず存在している。

そこで俺は損傷を受けた艦を内側に配置し、無傷の艦を前面に貼り付けた。これでしばらくの間は持ちこたえられるが、それでもガトランティスの囹艦隊と比べれば微々たる戦力だ。

我々は増援に駆けつけるであろう24隻のO級戦艦がこの戦線に到着するまでの間、何とかしてこの激しい攻撃を耐え抜かねばならない。

「くっ、幾ら破壊しても空から湧き出てくる。戦力差は広がる一方だ。しかも悪い事に戦線も少しずつ押されている」

「ご先祖様ー、今は撤退するべきだと私は思います」

「アタシも賛成! 出来る事ならあの浮き舟が居座っているラインまで後退するべきだと思います!」

「……分かった。今は後退しよう……一旦下がるぞ、みんな」

覚悟を決めたや否や、戦線を構築していた勇者達が一人また一人と空中艦隊が駐留する防衛ラインにまで後退してきた。

俺はその予想だにしない撤退劇に一瞬戸惑うものの、戦局の状況や戦艦コモンウェルスから送られる戦闘詳報によつてようやく理解した。迫るガトランティスの猛攻に対し俺は可能な限りの下準備を整え、空中艦隊は反撃を開始し各個撃破を目指す。

「……全艦、撃ち方用意……テッー！」

敵との距離は僅かに200m余り、もしくは未満。俺はギリギリにまで引きつけ反撃に転じた。

号令が発せられた瞬間、狙いを予め決めていた空中艦隊が一斉に砲撃を始め青いレーザービームが怒濤の勢いで敵ガトランティスに突っ込む。迷いなく突っ込むビーム光線にガトランティスは焦り交じりの反転行動を取るが……。

間に合わずに20隻余りの艦が文字通り火達磨の如く燃え上がった……のだが。

「敵が損害に構わず前進してきます！」

「覚悟はしていたが、その戦力差が激しい……増援は……増援はまだか？」

艦隊を守っていた小惑星群も既に尽き、今や丸裸となった空中艦隊は一隻また一隻と前進してくるガトランティス艦隊に打ち取られる。

開戦時150隻余り居た一大艦隊は既に30隻以上が打ち取られ持てる現有戦力は120隻にまで減らされていた。だが未だその士気は熱く、目の前まで迫るガトランティス駆逐艦を艦ごとぶつける体当りでこれを撃破。

これよつて慢心相違となった艦は別のガトランティス艦に打ち取られながらも、その残骸で空中の道を閉ざした。戦場はまさに地獄絵図と化し、その生存率は脅威の12パーセント以下を示す。

16分余りの死闘を潜り抜け、現在尚も守備に就く戦艦の総数は遂に50隻を切り戦線は崩壊、ガトランティスは残存兵力の掃討に当た

り一部の部隊は矛先を俺たちに変えてやってきた。

もうダメか……誰もがそう感じ取ったまさにその時、勇者が持つス
マホのレーダーに全速力で向かう24つの影が隊列を成し降臨する。

「風先輩！ レーダーに沢山の影が映っているよ！」

「まさか……敵の新手か!?!」

「……後方からとんでもない速度で私達の陣地に迫ってきます！ 2

4つの影が高速で向かってきます！」

「ツウエンティーフオーも!?!」

「みなさん、戦闘配置についてください！ まもなくその視界に入ります！」

「24……ついに来てくれたか」

勇者に緊張感が走る中、俺は安堵の表情を浮かべ彼女らが指摘する後方にその視線を向けた。そこには24つの光が暗い空を明るく照らしていた。

新兵器『艦首統括速射砲』を搭載した24隻の最新鋭戦艦はドレットノート級をモデルに設計、建造され遂にその初陣を飾る事となる。

オライオン級戦艦は勇者達の歓迎を手厚く受けながら絶望の淵に立つ戦列に加わって行った。パレードはまだ終わらない。俺たちは勝つその瞬間までこのパレードを終わらしたらいけないんだ！

奮発！ 艦首統括速射砲！

勇者の目前で隊列を成すのは、短期間での量産を成功させた24隻の最新鋭戦艦。その一番艦は“オライオン”と名づけられ元々は対勇者戦用として計画、建造されていた。だが俺個人の決断により、オライオン級は今敵であったはずの勇者と共同戦線を張っている。

オライオン級のメインウェポンとなっている艦首統括速射砲は本来、小回りが利き耐久力の高い勇者に対抗出来る唯一の兵器として俺は多いに期待を寄せていた。

ヤマトらが装備する波動砲は、四国或いは地球を破壊しかねないとされ自称神様にその運用を拒否された。まあ、当然の流れではあるが。木星の浮遊大陸を消し飛ばしてしまつたあの恐るべき兵器波動砲はこのような経緯があつて永久に封印された。

生み出そうとしても、神様の制限が掛かり思うような形に仕上げられなくなっている。そこで、代用品として誕生したのがこの“艦首統括速射砲”と言う厨二が掛かつた長つたらしい名前の新兵器である。

「全艦マルチ隊形を取れ！ これより艦首統括速射砲の実戦投入に移る！ 持てるエネルギーを艦首発射管に注入！ 命令あるまでその場で待機せよ！」

「壇上……だったか、私達は一体何をしたら良いんだ？」

「艦首統括速射砲は波動砲よりも威力が抑えられているとは言え、勇者のみささんが艦よりも前に出ればその巻き添えを食らう可能性が充分にある。だから、今はオライオン級の後方で待機していてくれ」「……オライオン級ってあの前に居座っている新型の事か？」

「ああ、そうだ。別にO級と呼んで貰っても構わない。本日付で本艦の機密を解除する」

勇者達が戸惑う中、24隻のオライオン級は横一列に隊列を整え艦首に半分以上のエネルギーを注ぎ込む。

統括と言う名の付く通り、主砲や対空砲などの他の箇所には散らばつ

ている破壊エネルギーを一気に艦首へ送り込みタイミングを見計らって放出すると言うメカニズムを持っている。

これによりその破壊力は二倍、三倍に膨れ上がれ敵の一個艦隊程度なら軽く葬れる力を秘めている。また敵が密集していれば一隻で百隻単位の敵艦を文字通り塵以下の存在にしてしまう恐ろしい兵器だ。

『こちらオライオン級戦艦の十一番艦「オセアニア」、全艦エネルギーを艦首に集め何時でも発射できます』

「……勇者は対閃光防御！ 目を隠せ！ 艦首統括速射砲、発射ア！」
『撃ち方始めッ！』

「目を隠せて、私達サングラスなんて持っていないんだけど!？」

「何でも良い、腕を覆うなりして自分の目を守ってくれ風さん！」

刹那、オライオン級の艦首から言葉では良い表せないほどの眩い光が溢れだしその光景はとても直視できない。

劈くような発射音と共に出現したその光は最低でも5分以上は続き、目を開けるようになったのは辺りが静まり始めた頃の出来事であった。

その頃には、あと一步のところまで迫っていた470隻ほどのガトランティス艦隊が一気に70隻ほどにまで撃ち減らされ、生き残った艦は大きく反転し何の躊躇もなく撤退を始める。

その様子をオライオン級は高みの見物のように鎮座して眺め、追撃しようとする艦は一隻も現れなかった。そればかりか、次の発射に備え新たなエネルギーを艦内で生み出し再び艦首に送り始める艦の姿もあった。

しかも発射準備は六分も掛からず、艦首は再び光に包まれて逃亡するガトランティス艦艇の息の根を止めようと再び一隻のオライオン級から放出された。

「私、まだ目を隠す準備が出来ていないよ!？」

「だが見ろ！ 一隻程度の光ならまだ直視する事が出来るみたいだ」

「あちやー……戦いが一瞬で終わっていくな。部長、私もう帰っても良いですか？」

「いいんじゃない？ もう片が付きそうだから」

「もう全部あの舟に任せても良いんじゃないだろうか？」

「私もそう思います、棗先輩……」

全員が呆気にとられている中、十四番艦「オメガ」の放った艦首統括速射砲が逃亡するガトランティス残存艦艇に直撃。燃え盛る炎を残してその全てがネジの一本も残らずに消滅した。

スマホのレーダー上に敵影は映らず、俺たちはその光景を棒立ちしながら眺め樹海解除の瞬間に立ち会ったのである。

日常の中に潜む巨大な影

「えっと……じゃあ改めて自己紹介をさせてもらおうね。私の名前は犬吠埼風。で、こっちが妹の樹。この勇者部の部長よ」

「ウツス、よろしくお願ひします。俺の名前は壇上春男、何処にでも居る平凡な男子高校生だ。自己紹介終り！」

「えっ!? 自己紹介、それだけ!？」

「幾ら何でも適當すぎるでしょ……あつ、私の名前は三好夏凜。よろしく」

「ウツス、宜しくお願ひするぜ」

「い……犬吠埼樹です……よ、よろしくお願ひします!」

「ウツス、宜しく。俺は気軽に壇上と呼んでくれ」

樹海化が解除された直後、俺が目覚めたのはホテルの一室とかホテルの目前ではなかった。目覚めた先は勇者部と名乗る一風変わった部室の中。

部室には数多くの備品やガラクタがひしひしと溢れ、またその人口密度も部屋の広さに似合わぬ物となっている。いや、幾ら何でも多すぎでしょ。女子との幅がほんのちよつとしかないと言つても過言ではないぞ……これ。

「東郷美森と申します。普通に苗字で呼んでください。えっと……壇上君は何か特技をお持ちですか?」

「特技……? ……そうだな、ちよつと待ってくれ。今すぐ適當に決めるから」

「特技適當で良いのー? あつ、私の名前は乃木園子つて言いますー。乃木園子、中学生バージョンだよー」

「同じく、乃木園子。小学生バージョンなのでーす!」

……どう言う事だ?

「……まあ、良い。よろしくな、二人共」

「……貴方、自分の事余り理解していないの？」

「別に、特に拘っていないからな。で、お前の名前は何て言うだよ」

「私の名前は楠芽吹。32人防人のリーダー……と言えれば分かり易いかしら？」

「ふーん、なるほど。ようするにこの部活にはリーダーが複数居るわけだ」

「言われてみれば、そうね……確かに」

「お姉ちゃん……」

特技を決めるのは……この特技診断と言うサイトを使ってみよう。自分の名前を入力していき、診断結果と言うボタンをクリック！

出た！ 出た内容は……へ人生なんてもう嫌だ！ と言いながら生きられる！特技だって……は？

いやいやいや、自分で出しておいて何だけど……これどう言う意味？ ようするに自分の特技は自虐趣味と言う解釈で良いの？ これ。それとも何？ 哲学でも専攻しておけって言う「あの神」からの暗示なわけ？

「……それで、どうでしたか？ 壇上先輩」

「あつ……そっか、樹ちゃんから見たら僕は一応先輩と言う事になるんだね」

「いや、年齢的に私から見ても充分先輩だからね？ アンタ」

「えっ、部長も何ですか？ て事は今俺がこの中で一番最年長者且つ、唯一の男って言う認識で言い訳？」

「……そうなるわね」

「ウソダドンドコドーン！」

それ、何てハーレム？ まあ、こんな「特技」じゃあハーレムなんて形成できる気がしないけどな！ とにかく、もう一度自分の名前を入れて診断結果を見るぞ。

名前を全て平仮名に変更して、再度診断だ！

結果はへスゴクカタイアイスを食べる事……だそうだ。

……あれっ？ おっかしーなー？ まともな診断結果が出ないぞ？ このサイト。しかもこの特技さ夏に特化しすぎてね？

もういいや。俺の特技、とりあえず〈哲学〉に全振りつて事で。それ意外は知らん。さて、哲学に関する本やらサイトやらを読み漁るとしますか。

「で、貴方の特技は一体何なのよ……」

「……〈哲学〉だ。人生とは何か……それを探るのもまた、哲学だ」

「……貴方、大丈夫？ まるで死んだ魚のような目をしているけど」

「さつきから横槍が失礼極まりないな。だが、お前の名前を聞く程度で許してやろう」

「郡千影よ。しかも、何で上から目線なのよ」

「上級生だし……趣味が哲学だからな（白目）」

「……貴方の状況を察するに……出なかつたのね、まともな診断結果が」

「バーロー、そんな可愛そうな奴を見る目線でこつちを見るんじゃあねえ。」

「俺だって、好んでこんな結果を出したわけじゃあないんだよー！」

「畜生メエエエエ！」

地下深く眠る無数の鋼

勇者達と共に戦う事になってから、既に二週間は経過した。俺も勇者部の一部員として部活動に可能な限り参加してきたもののやはり、勇者部の緩い日常は中々慣れない物だ。夏凜が疼くのも思わず納得してしまう。

慢心せぬよう、俺は時々こうして瀬戸内海奥深くの海底に創造された「瀬戸内海海底基地」に足を運び今後の戦局を見据えている……つもりだ。

「……消耗戦になるだろうな。よろしく頼むぞ、信濃」

無数に広がる数多のドックの一つに、その巨体を密かに隠す巨大戦艦の姿があった。旧海軍の大和型戦艦をモデルに設計、建造されたこの戦艦は俺の切り札。

信濃型中核戦艦は51cm三連装電磁衝撃砲を三基九門搭載し、艦首にはお馴染みの艦首統括速射砲を装備。無数の対空砲から新たに増設された九連装対空噴進砲も両舷に二基ずつ搭載している。

ガトランティス航空機には勿論、勇者達が時折話す「バーテックス」と言う脅威にも本艦はある程度耐えうる最新鋭艦としてその初陣を飾るであろう。

「バーテックスか……」

それはある日突然空から飛来してきたと言う未知なる生命体。その巨体に似合わぬ大きな口を用い、若葉曰く多くの罪無き人々を貪り、食ったと言う。また、その中核である白い塊は「星屑」と呼ばれ人類の多くはこの種によって食い散らかされたと言っても過言ではない。

若葉から受けたこの禍々しい未知なる生物に対抗するため、信濃型以降の艦船は建造されたのである。主砲である51cm三連装電磁

衝撃砲は「星屑」を文字通り粉々にするためだけに設計された新兵器。

その新の実力は、まだ俺の知らぬところにある。

「こんな所に居たのか、探したぞ」

「……なんだ、若葉か。出来る事なら勝手に立ち入らないでくれるかな？ 此処は軍事機密の塊のようなところだからね」

「先ず最初にこの基地を案内して、自由に足を運んでも構わないと公言したのはお前だろう、壇上。まあ良い、風さんがお前を呼んでいる」
「……フム……部長さんの依頼について窺おうか」

「風さんは一週間ほど前に行方不明になった子猫の捜索用として、壇上から数隻駆逐艦や哨戒艇のような、小さく小回りの効く艦艇を投入して欲しいと」

「子猫を探索するために態々哨戒艇を勇者部に派遣するのか……てか、それだけ人員が要るのなら別に派遣しなくても良いんじゃないか？」
「艦艇には人が立ち入れないような山岳部の捜索が勇者部より熱望されている」

「はいはい、そうですかそうですか。じゃあ適当に足回りの良い高速艇か部長さんの言う小柄な哨戒艇を後で派遣しますよっと」

「後からじゃあなくて、出来れば今すぐ派遣して欲しいのだが受諾の件は了解した。直ぐに風さんへその旨のメッセージを飛ばそう……ウム？」

若葉が部長宛のメッセージを送信するため、自身のスマホを取り出したその時。彼女の視線はスマホの機動すらしていない真つ暗な画面ではなく、基地内にある別の造船ドックに向いていた。

「どうした？ 送らないのか、その旨を？」

「ウム……いや、何……また前回此処を訪れた時よりも入渠中の戦艦が増えたかと主ってな。と言うよりドックその物が増えた気がする」
「んあ……？ ああ、あれかい。あれは別に、若葉が気にするような代

物じゃあないよ。対バーテックス戦用に建造された新鋭艦だ」

「……名称を窺っても構わないか？」

「……そんなに気になるのかい？ 仕方ないなー、別に隠す必要もないから今日だけ特別に教えるでしょう。俺は“あの戦艦”を単純に『天鈿女命（アメノウズメ）型前衛ドリル戦艦』と呼んでいる」

数多の塊が基地から離れる時

若葉との対談から数十分、俺は部長直属の命令により此処瀬戸内海海底基地から少なからずの哨戒艦艇を派遣した。

この時海底基地を飛び立ったのは本来四国を覆う壁の外を調査するためだけに建造されていた『初雁型特務哨戒艇』

このタイプは地球防衛艦隊の駆逐艦を参考として建造され、速力、機動力共に他の艦を上回っているのが特徴的だ。また当艦は波動砲を搭載しておらず武装も戦艦や巡洋艦と比較して非常に少ない。

初雁型の武装は前部正面に連装砲を一基、後部に一基搭載。これが主砲としての役割を果たし下部にも同じ物が一基搭載されている。

だが勇者達が良く口ずさむバーテックスと言う脅威に対して、俺は今現在何も出来ずに居る。一応、それに特化した艦艇を幾つか整備しているものの実戦不足なためどのような攻撃をしてくるのかさっぱり検討が付かない。

「……何だその地震速報のような音は？」

「樹海化警報だ。間もなく、バーテックスとの戦闘が始まる」

つい今しがた初雁型特務哨戒艇が出発したばかりだぞ？ もし戦艦よりも比較的火力の少ない哨戒艇がバーテックスと対峙した時……一体どうなるかは想像しなくても直感的に理解できるような気がする。

「そう言えば若葉。俺はまだバーテックスと戦った事がないんだよな。今の今まで俺は寧ろお前達勇者と対峙してきた。奴らとの戦闘はこれが初陣と言っても過言ではない」

「……だから……何だ？」

「もし、艦隊が奴らの攻撃で総崩れになったら……その時は戦線をよろしく頼む」

「……何ッ？」

一時期固まったのち、若葉は我に帰って何かを口走ろうとしていた。が、樹海化警報と言う音が更に強くなり辺りの風景は花びらのように散って行く。

世界が樹海化する一歩手前、基地に駐留する各艦は出撃準備を急ぎ既に宙へ浮いている艦も多く居た。これだけの戦力が整えば多少は持ちこたえられるだろう。勇者との共同戦線はもう始まっているんだ。

「全艦抜錨せよ！ 目標はバーテックス、俺は各艦の奮闘に期待する！」

「各艦エンジン点火、戦艦オリョール既に抜錨。戦艦オリスカニーも間もなくドックを離れます。巡洋艦、駆逐艦の各艦も順次抜錨！」

無人のコントロールセンターから各艦の行動記録が棒読みながら読み上げられていく。オライオン級は勿論の事、新造された天鈿女命型も動き出し数を補うため多少埃を被った旧式艦のエンジンも唸り始める。

樹海化寸前にも関わらず基地内部は進発する艦の騒音で活気に包まれている。次々とドックから離れ行く多くの兵を眺めながら俺は遂に樹海化した戦場へその第一歩を踏み出した。

「……此処が樹海か」

勇者空中同盟最初の初陣

「全員集まったな？」

「みんな居るよー！」

「はい！ 誰一人欠けて居ません！」

世界が樹海に染まって早数分。既に勇者の姿に変身していた若葉達は今こうして状況を把握しやすいよう全員が一箇所に終結していた。全員の枠組みには当然、俺も含まれておりまた、所有する空中艦隊もそのカウントに入っている。今回抜錨した空中艦隊の艦艇数は総数で百二十隻に昇り、現在も続々と支援艦隊が樹海内への進出を試みている状態だ。

「わー、空一面が空飛ぶ戦艦で埋めつくされているよー！」

「と言うか、まだこんなに居たのね……」

「何処から湧いて来たのよ……コイツら」

千影の意見は最もだろう。我が空中艦隊は一週間前からこの対バーテックス戦に備え戦力を備蓄してきた。その立役者は当然、瀬戸内海奥深くに眠る瀬戸内海海底基地の秘密ドック郡なのだが、その他にも密かに建設され続けてきた『第二基地』『第三基地』の存在が極めて高い。これらの基地は未だ勇者達の知らぬ所にあり、場所は四国を跨ぐ多数の山脈郡の地下深くに存在する。

第二、第三基地ではオンライン級を始めとした最新鋭艦の建造及び技術的な検証を秘密裏に重ねてきた。この場に居るおよそ三割の艦艇は、その第二、第三基地で整備、建造されてきた兵達だ。バーテックスがどの程度の脅威になるか分からなかったから、つい大量出血サービスを物理的に展開してしまっただけ全く。

以上の三基地が全力を挙げて艦艇を整備してきたのだが、それでも戦場に間に合ったのは僅かに総戦力の五分の一。そして基地内に取り残されているであろう艦艇は総計三百隻以上に昇るだろう。これ

は、後になって分かった事なのだが艦艇が樹海と呼ばれる世界へ突入するには、最低でもドックから離れ空中に浮いていないと行けないらしい。出撃準備中の戦艦はもれなく、基地内での留守担当艦として任務を全うせねばならないのだ。

「そこそこ離れているから、此处から見ると真っ黒い塊が幾つも浮いているように見えるねー」

「そうだねー」

「そうだよー!」

……園子ズ達の反応は一先ずおいておいて、現状の把握を優先しよう。現在樹海内に展開する宇宙艦隊は先述した通りの数値で、どれも最近就役したばかりの最新鋭艦だ。旧式艦は損傷や最新鋭艦について行けないと言う理由でどれも補助戦力に回されている。専属留守担当艦と呼んでもおかしくはない。

数百隻余りの艦艇で、未知なる敵バーテックスに対し対抗出来るか否かと問われれば少々不安が残る。完璧な守備体勢なんて鼻から無いんだ。それはもう、対勇者戦没において学んだだろう。今、俺に出来る事は、共に戦う彼女らの負担をなるべく軽減する事にある。勿論、このかき集めた空中艦隊で。

「さて、どう攻めようかしらねー」

「中央突破で良いんじゃない? 無難で何時も通りに」

「そうですね、今回のバーテックスも大した数ではありませんし、雪花さんの言う通り真っ直ぐ突っ込んで敵を殲滅すればよろしいかと……」

部長の問いに対し、後方支援に当る須美ちゃんの後押しが入る。まだ小学生なのにこの三人はとても勇敢だな。俺も頑張らなくちゃ。

「……ッ! バーテックスを視認しました! みなさん、順次戦闘態

勢に入ってください！ 敵の中には昨日居た謎の艦隊も含まれているようです！」

「良し！ 前衛はこのタマに任せタマえ！」

「勇者達よ、私に続け！」

杏の言う昨日居た謎の艦隊は……察するに自称神様が繰り出すガトランティス艦隊で間違いないだろう。彼らと共に戦うなんて真つ平御免だ。どうせ戦うなら今この場に居る勇者達か原作で同盟を結んだガミラス艦隊の方が良い。

さて、奴らの艦隊には“火焰直撃砲”を備えたメダルーサ級殲滅型重戦艦が随伴しているのやら居ないのやら。

「謎の艦隊は任せろ。こっちで引き受ける。部長達はガトランティスに構わずバーテックスを殲滅してくれ」

「艦隊は任せたわよ、春男」

「あたぼうよ、バーテックスはお前に任せるぜ夏凜」

彼女達と同盟を結んで早一週間。俺たちは戦場と化した樹海で今日も虎視眈々と暴れまくる。

天鈿女命の特製ドリル

メダルーサ級殲滅型重戦艦の随伴については、火蓋が切って落とされた現在も明白な答えを得る事無く、戦況は膠着化しつつあった。我が軍の戦線を支えるのは当然前衛で猛々しく戦う勇者達なのだが、それを背後から支援しているのは言うまでもない我が艦隊。ブロック工法などで大量生産されたオライオン級戦艦を筆頭とした『勇者空中同盟軍』は、艦首統括速射砲を上手く使いまわし、現在までにガトランティス側の損害は三十を数える。

しかし、これだけの損害を被っても尚ガトランティスの勢いは衰えるところを知らず強引とも言える無謀な突撃を繰り返してくる。無謀だけなら、それで良いのだ。

「前に進めば進むほど、ガトランティスの数が増えていくんだけど……」

「まるで、害虫のように何処からともなく沸いてくるわね」

「あれえ？ バートックスの数がガトランティスよりも少ないよ？」

勇者達が懸命に戦う各戦線より、最新の情報が逐一俺の目前に投影されていく。スマホの勇者通信なるアプリによって各々の連携が図られているわけだが、どうも敵の戦線はほぼ全てガトランティス側が支えているらしい。バートックスの数も尋常と言うわけではなく、寧ろ消極的。戦闘開始から僅かに十二分余り。バートックスの軍勢は遂に勇者達の活躍によって呆気なく討伐されてしまう。

これによって、緊急出航した対バートックス戦艦「天鈿女命型前衛ドリル戦艦」の活躍はほぼ皆無となってしまふ。さすれば、この艦首に添えつけられた無数の巨大推進ドリルを戦線打開のため一斉にガトランティスへ向かって投射するのみか。

「天鈿女命型は、オライオン級よりも前に出る。これより、滞在する全艦を持ってガトランティスに向けた攻勢作戦を前面的に展開する」

「えーと、私達はもうしたら良いのかしら？」

「……そうだな、部長達は側面から味方の流れ弾に注意しつつ攻勢に入ってくれ」

「分かったわ」

これらのやり取りは、全てスマホに搭載されている勇者通信による無作為な通信記録である。そして、パーティー全体で共有されるこの会話は全て後方に待機する情報収集艦によつて傍受される。内容は全て検問され、いざと言う時に備え大切にデータごと保管されるのだ。最も、その大切な時とやらいまいち良く分かっていないのだが。

ともあれ、我々『勇者空中同盟軍』は残党と化したガトランティス艦隊を殲滅するべく前向きな攻勢に打って出た。側面からは、勇者と予め配備されていた駆逐艦などによる面制圧が行われ、主力である前衛からは天鈿女命が搭載する巨大推進ドリルによる掃討作戦が実行に移される。

艦首と接続されていた巨大なドリルが、今、ガトランティス目掛けてゆっくりと切り離されていく。ドリルの後部には使い捨ての推進器が添えつけられており、小柄ながら充分な馬力をその場で得る事が出来る。毎分30キロで突っ込む40規模の巨大なドリルが一路ガトランティス目掛け直進し、突出していた一部が遂にガトランティスの前衛艦に突き刺さる。

メキメキと言う鈍い音を立てながら、ガトランティス艦艇は艦首から爆散していく。この時点で、既に十隻余りほどが轟沈、或いは大破、航行不能に陥っている。残る30規模の推進ドリルは迷う事無くガトランティスの艦艇に突き刺さり、彼らを地獄の底へあつと言う間に招待してしまうのであった。

孔明がそう囁いているんだもん！

巨大な推進ドリルを全て放ち終えた天鈿女命型は、最早ただのオライオン級と言っても良い艦影になる。

ドリルが備え付けられていた艦首は、大きな穴が開きそこには艦首統括速射砲がガトランティスを狙うように沈黙している。

この二種類が、現在俺たちの戦線を支えている最新鋭戦艦となるわけだが、戦局は以前として防戦一方。

攻勢に入る隙も無く、ガトランティスは何処からともなく百隻単位で艦隊を繰り出してくる。勇者空中同盟軍艦艇は、ただ消耗していくだけだ。

「よし、私が突っ込む。壇上はオライオン級で私を援護してくれ」

「待て、一人であるの只中へ突っ込むと言うのか!? 馬鹿な真似はよしたまえ」

「しかし、戦局は一向に変わる気配はなく私達は少しずつ追い詰められているじゃあないか。此処は何人かの勇者で戦線を押し上げるのが専決だと思うのだが」

「私も、若葉の意見に賛同するわ。前衛は任せなさい」

血気盛んな一部の勇者達が、若葉の意見に耳を貸し武器を携えて艦隊よりも前に進出しようとしていた。オライオン級と天鈿女命が支えている防衛ラインよりも。

空中に漂っている戦艦のため、勇者に対する誤射は滅多に無い。が、勇者達が前に赴けば艦首統括速射砲の射線に入ってしまう。

今でも、連続して同砲を発砲し続けているが、これも勇者達が後ろで星屑達を掃討しているお陰とも言える。

バーテックスの本隊(?)が消滅したとは言え、以前として星屑と呼ばれるバーテックス達の取り巻きはガトランティス同様、健在である。

奴らは俺を見つけるや否や、恐ろしいぐらいの速度で大きな口を開

け突っ込んでくるが、その都度、若葉や結城らの活躍によってこの難を退けてきた。

やはり、一人で広大な土地を守ってきた歌野や棗。そして雪花はこの場面で相当な強さを発揮し、オライオン級に寄り添う星屑達を手当たり次第殲滅していく。

天鈿女命達も、これに安心して背後から迫る敵は完全に勇者達に任せっきりの状態になっている。

各個撃破に専念しつつも、一挙撃破のチャンスを窺っていたつもりだった。

「やはり、彼らの母体を落とさない限りは永遠に増え続けるのでしょうか？」

杏、それを言ってしまったら、奴らの母艦とも言えるあの白色彗星を相手にせねばならないのだぞ？ 冗談はよしてくれ。

「そうだよなあ！ これじゃあきりが無いよなあ！ やっぱり、奴らの奥地に母体となる巨大な戦艦が悠々と浮かんでいるはずなんだよお！」

短気を切る珠子の相手は誰かがしてやってくれ。まだ、突っ込むタイミングでは無いぞ。俺の背後で孔明がそう囁いている。

「まあ、待て。そう早まる出ない。そろそろ“例の艦隊”が此処に到達する見込みだ。だから……何とかそれまで耐え抜いてくれないだろうか？」

「例の艦隊？ また妙な言い方をするもんだねえ」

「言い方から察するに、多分私達の援軍かな？ じゃあ、もつと頑張らなくちゃね！ ぐんちゃん！」

「全力で此処を死守するわ。高嶋さん」

切り替えの早い郡さんは置いておき、高嶋を筆頭に此処をもう少し耐えてくれる勇者達が突撃派よりも増えつつある。

オライオン級をより発展させた『アンドロメダ級』や『春藍級』、そして艦首統括速射砲を四基搭載する『プラハ級』が戦線に到着した暁には、ガトランティスなどおそるるに足らず。

最も、プラハ級に到っては未だに一番艦が建造中なれども、前者の二タイプは間もなくこの戦線に到達する予定だ！

耐えろ！ 耐えるんだ、勇者よ！ 勝利の女神は、確かに我らに微笑んでいるぞ！

「壇上君……！ 危ない……ッ！」

……へ？

奇抜空母、此処に現る！

頭上には数隻のククルカン級襲撃型駆逐艦が、縦一列で俺目掛け突っ込んでくる。

襲撃型……と言う名前に相応しい戦法だ。

回転式の大小異なる四つの砲塔から、カシミア・グリーン色のレーザー光線が放たれた。

レーザーが地面へ直結し、射線から一応は当たらないと言う確証が持てるが、身震いだけはどうしても敏感に発生してしまう。

今、自分が狙われていると思うと鳥肌が立ってたまらない。

空中艦隊は前衛に張り巡らせ、後方に置いている艦は殆どない。居たとしても待機していたオライオン級が二隻居るかどうかだ。そもそも、「待機しろ」と言う命令は俺から発せられていない。

頭上を警戒せよ……なんて命令もなおさら。

ならば、自分で警戒するしかなかったんだ。

なのに、

今回ばかりは、真っ先に気がついた高嶋友奈に感謝するべきだろう。

「クソツ……前が見えねえ……」

視界をやられた、

それだけは直ぐに実感する。

もくもくと漂う着弾時の黒煙を腕でなぎ払いながら、真っ暗で何も見えなくなっている頭上を反射的に見上げた。

すると、

そこには複数の爆発音が地響きのように耳を劈き、付近で破裂する。

勇者の誰かが、数隻居たククルカン級を仕留めたのだろう。

おそらく、高嶋じゃあない、誰かが。

「壇上君、大丈夫!？」

「ああ？ ああ……大丈夫だ」

「怪我はなさそうね」

真つ黒な黒煙を突っ切ってやってきたのは、高嶋と、それに動向する千影だ。

高嶋は俺の心配をし、千影が負傷の有無を確認した後、周囲の警戒を始める。

次第に黒煙は晴れ、上空には何も居ない事が明確になると、俺は安心して艦隊の指揮に移行する。

戦線は相変わらず膠着しているが、一応優位には立っている。

艦艇数は劣勢ながら、やはりその搭載兵器が十分な威力を発揮しているのだろう。

オライオン級から放たれる天色の光線がガトランティス艦艇を貫く。

数百隻から成る前線艦隊に綻びが目立ち始めた頃。

起死回生の一撃が瀬戸内海底基地より、大規模な空間ワープをやったのけた。

出撃体勢が整っていた新鋭各艦が樹海へ向けて旅立つ。

出力を最大にし目的地を樹海へ固定するのだ。

「みんな！ 空を見て！」

「どうしたの？ 友奈!？」

「風先輩、アレを見てください！」

友奈が指差すのは、不思議な色で彩られた樹海の空。

しかし、その一部にはまるで空間を無理やり捻じ曲げたかのような「穴」が無数出現し、前衛の増援艦隊が間もなく到着する。

ほぼ無理やり。

急ピッチで建造された改オライオン級を始め、その発展型であるアンドロメダ級、さらには艦隊旗艦として建造された前衛武装航空艦「春藍」の姿もあった。

海底から樹海への大ワープを行った事で、上空に副作用として発生する無数の空間の歪みが、後遺症として空の随所に点在する。

春藍を含めた最新鋭艦はそこから這い出てきたのだ。

中にはアンドロメダ級を簡易的な構造にし、戦時急増艦として建造された瓜二つの「桜型前衛航空艦」の姿もある。

桜型の外観はアンドロメダ級とさほど変わらない。

しかし、不要と判断された機材や空間は全てカットされ、瀬戸内海海底地下基地にて大量建造されたのだ。

桜型は艦首統括速射砲を艦首に二基装備し、これはアンドロメダ級とほぼ変わらない。

代わりに、アンドロメダ級も五隻量産され、五隻とも今回の戦に参加した。

戦艦型としてアンドロメダ、アルデバラン、アキレスが就役。

空母型もアポロノームとアンタレスが就役し、その外観は勇者達を驚かせた。

「艦橋の上になにかがくっついている」

「また奇抜なデザインね……」

「変な格好……」

と、散々言われているがその性能は勇者の度肝を抜くだろう。

アポロノーム型（そう呼んでいるだけ）は実に180機の艦載機を保有し、一度に48機もの艦載機を射出するのだ。

そして、俺は当然その空母を重視した。

アンドロメダの戦時急増艦として建造された桜型にも、アポロノームを意識した空母型が存在する。

性能を重視した俺は外観など気にしない。

アポロノームを簡易的に設計、建造した橘型もこの戦に参加。

十四隻もの姉妹艦が即席で作られ、十四隻とも当然参加している。

ちなみに、戦艦型の桜型も十八隻が建造され樹海にやってきた。

アンドロメダとアポノーム両者を前に出し、改オライオン級がその後続く。

桜型が改オライオン級の背後から大ワープを敢行し、

橘型もそれに続いた。

戦力は、

一気に向上した。

瀬戸内海海底地下基地が遂にその刃をガトランティスに向けたのだ。

無数……と言う表現が良く合う新鋭増援艦隊が今、樹海の空に現れる。